

---

# 魔法先生レオま！？

春秋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生レオまー！？

### 【Zマーク】

Z7938V

### 【作者名】

春秋

### 【あらすじ】

主に麻帆良を舞台にネギのお兄さんが頑張つていく物語です。

## プロローグ

村が燃えていた。

いつも世話をしてくれていたお婆ちゃんも、  
魔法を教えてくれたお兄さんも、  
よくミルクをくれたマスターも、  
悪い事をしたら叱つてくれたおじさんも、  
全員石になってしまった。

魔法に巻き込まれて粉々になつた人もいるし体の一部が無くなつた  
人もいる。

大好きだつたおじいちゃんは粉々になつて風に飛ばされていった。  
手にはお祖父ちゃんだつた砂だけで、  
心には絶望だけで、家はもう灰になつていて、  
目の前には燃える村だけだつた。  
生き残つたのは俺と生き残つた兄弟と死にかけの姉と神父さんだけ  
だつた。

「……………か？」

神父さんが声をかけてくれる。  
でもなんて言つてるのかわからない。  
どうしたらしいのかわからない、  
誰がこんなことしたのかわからない、  
父さんが無視したのもなぜだかわからない、  
わからないわからないわからないわカラないわカラない  
ワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイ  
ワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイ

ワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイ。  
わからないことだらけだった。

もうわからないすぎてどうでもよくなってしまった。  
体がおじいちゃんの砂に覆い被さるよつに倒れる。

誰かに仰向けにされた。

もう目の前なんかばやけて見えなくて輪郭しか見えない。  
目の前の人は叫んでいるようだがなにも聞こえない。  
聞こえるのはバチバチという物が燃える音だけ。  
声をかけてくれる誰かの顔の横には笑つているような三日月が見える。

月に向かつて手を伸ばす。

幾ら手を伸ばしても月は掴めなかつた。

それが悲しかつた。目から涙があふれてくる。

もしも月が掴めたならば今日の夜は全て冗談だつたと事がわかるのに。

目をつぶる。月は掴めなかつたけどこの夜はすべて夢だつたのだと願つて。

次に目が覚めたときおじいちゃんと一緒に寝ていて、家にはネカネお姉ちゃんが朝ご飯を作つていて、ネギと喧嘩をするそんな日常を願う。

そうして、僕は闇に溶けていった。

結局、願いは叶わなかつたけれど  
生き残つた人とは仲違いになつてしまつたけど、  
家族が居なくなつてしまつたけど、  
大切なモノを失つたけど、  
代わりに新しい物を手に入れて、  
新しい願いが出来て、  
新しい家族が出来て、  
大切なことを知つて、  
大切なモノが出来た。

そうして古い自分は新しい自分へと生まれ変わつた。  
僕 俺

## プロローグ（後書き）

はじめまして、春秋です。

ここでいろんな物語を読んで書いてみたいと思ったので書いてみました。

処女作なので出来は良いとは言えないです。

みなさんの暇つぶしなればいいなと思います。

イギリスの山奥にあるメルティアナ魔法学校。その廊下でカソックを着た青年と魔法使いが着るようなローブを着た老人が歩いていた。

「で、用事とは何ですか？」

青年 レオナルドはにこにこしながら聞く。老人はそれを見て苦笑した。

「せつかりじやのづ。むつ少し落ち着いて話をじよつとは思わんのか？」

老人はそう言い立ち止まる。レオナルドも立ち止まり呆れたように肩をすくめた。

「なにを言つてるんですか、あなたは校長なんですから今は忙しいのでは？ ゆっくりする暇もないんでしょう？」

それにお孫さんの事もあるでしょ？」と付け加える。校長は少し眉が動いただけでポーカーフェイスを崩さない。

「その通りじゃな。  
では、単刀直入に言わせてもらひがネギと一緒に麻帆良に行ってくれんか？」

「断る

即答だつた。返答の早さに校長も開いた口が閉じれない。

「では、用事は済んだようなので俺は失礼します

「ちよつ、まつ、待つんじやー。」

レオナルドは引き止める声を無視して早その場を去つていいく。

校長が見えなくなつた頃、内側のポケットに入れていた携帯が鳴つた。買ったときのままの着信音を止め電話にでる。

「もしもし」

『『私だ、レオナルド』』

良く見知つた声だった。名前を言わないところは昔からだ。

「電話かけてくるなんて珍しいですね、どうしたんですか？」

『『用事があつてな、聞いてくれるか？』』

前もつて選択肢を選ばしてくれるらしい。大概命令形の言葉しか聞かないんだが。

「いいですよ、用事つてなんですか？」

『『麻帆良に行つてきてほしんだが』』

「は？」

時間が止まつた。正確には時間が止まつたよつに想つたではあるが。止まつた思考は彼の声で再起動する。

『なんだ、その反応は。

田上の人に対する言葉じゃないぞ』

「あ、はい。すいませんでした。じゃなくて！  
もう一度言つてもらえますか？」

レオナルドは聞き間違いであることを願つて聞き直す。が……

『どうしたんだ、お前らしくない。まあいい。麻帆良に行つてほし  
い、だ』

現実は無情である。彼は行つてほしい、と言つてゐるが十中八九命  
令だらう。

「……理由を聞いても？」

『理由か？

何でも15年前に消息を絶つた真祖が麻帆良にいるらしい。それを  
確かめてきてほしいんだ。

お前ならすぐ終わるだろ?』

『それは別に俺じゃ無くてもいいのでは?』

他の組織の麻帆良侵攻に合わせて数人送り込めばいい話です。実際に行くことになるのはまだ先の話です』

即興で考えたにしてはいい出来だった。今情報だけならばこれで回避できる。むしろ回避させてほしい。誰だって厄介事は引き受けたくない。

『確かに、それ一つだけだつたならばそれでもよかつたんだが……』

『ほかに何かあるんですか?』

やはり真祖のことだけではないらしい。願いは神には通じなかつた。神の仔に仕えてゐるのになあ。

『黄眉の姫御子がいる、という噂がある』

『……信憑性は?』

『かなり確かだ。』

それにコノエコノ力と同室になつてゐる。

あの狸爺が自分の孫娘と同室にするんだ。怪しいと思わないか?  
名前は神楽坂明日菜だそうだ』

麻帆良の狸爺に関してはよく聞く話だった。

腹黒いロリコンだつて。信憑性はかなり高い話だ。

今いるウェーラルズにも届いてきてるしな。

その狸の身内と同居する奴が普通なわけはないだろつ。

十分にそれだけでも怪しいのに、名前がアスナなんて應ず『気』があるのか気になるところだ。

『それに確かに前弟が麻帆良に行くはずだろつ？ 丁度いいじゃないか。

警戒はされるだろつが居ても強制的に排除される可能性は零に近くなる』

『前におまえが話していた彼女も雇われているらしいんだ』

あれの情報は魔法使いの中でも上の奴しか知らないはずなんだがどうやって知ったんだろう？

どうやら沈黙を渙つてはいるよつて思つたらしく次の餌をつるしてきました。

彼女に会えるなら別にいいかも、と考えてしまつ。随分と疲れている証だ。休みたくなる。

「……これは命令ですか？」

『ああ、命令だ』

「どうしても？」

『ああ、どうしても、だ』

はあ、と溜息を吐く。

「了解しました。その任務やらしていただきまわ」

『せうか、では報告を楽しみにしてる。詳しくは後でアシへ送つておこう。しつかり計画考えておけよ』

「よろしくお願ひします。あ、あと始めに名前はちやんと言つてくれださい。間違えたらどうするんですか。関係のある情報は全部くださいよ。予想外の事なんてよくあることですか？』

『確かにせうだな、考えておこう。情報に関してもいろいろが持つている情報は全部送つとく。では、またな』

「ええ、それでは」

ピ、とうとう電子音がしたあと電話が切れた。携帯をしまい先ほど断つた話を受けるために来た道を戻る。道中初めの選択をした私を呪う。きっと断つっていてもやらされたらどうが、自分への言い訳にはなったと思う。一つ田の角を曲がったとき先ほどの話を受けられるか心配になり、校長のもとへ駆け足で向かっていった。

……でもせっかくが早ごと黙つただけじゃね。

「ひして青年は舞台へ上がり物語は始まつを告げた。

駅を降りて改札を通り過ぎる。

天気は快晴。雪があること以外はいい天気だ。

ラッシュの時間にはばれていますが、人影は少ない。はあ、と息を吐き出し歩き出す。吐く息は白かつた。

流石に何時間も乗り物に乗っているのは疲れた。

荷物も重いし。寒い所為で体が動きにくいし。

ゆっくりしたいなあ、と呟く。今の俺の状態を知り合いが見たら目を疑うだろう。

だがここにいる知り合いなんて一人しかいないし、その知り合いも今は授業中だろう。

「えーと、あなたがレオナルド君ですか？」

いきなり声をかけられる。俺は声をかけられるまで気づかなかつたことに驚き勢いよく振りかえった。振り向いた先には女性がいた。寒さ対策の為か、服をしつかり着込んでいる。

「どうも、案内役のシャークティと申します。……レオナルド君で合つてますよね？」

女性はどうやらシャークティと言づらしい。

シャークティは俺から返事が無いことに不安になつたようで再度本

人が確認していく。

「はい、確かに私がレオナルドです。すいません、ちょっと田を離した間に田の前に美しい女性が居たのですか？」

「顔をいつも通りに直しあ世辞も混ぜて返事をする。昔、知り合いで女性と会つたらとりあえず誉めとけ、と言われたことを実践してみた。

「ふふ、美しいなんてありがとついじゃります。お世辞でも嬉しいです」

「いえいえ、本音ですよ。お世辞な訳がないじゃないですか」

シャークティはくすくすと笑い、俺はははと笑う。  
実にのどかだ。癒やしを感じる。

ここ数ヶ月で溜まった疲れが癒される。

「では、案内をせてもらいますのでついてきてください」

シャークティは「一〇一〇」したまま先行してくれる。俺もそれについて行く。道中にはここに来るまでとか、俺も同じ宗教を信じていることが分かつて神の仔について話をしたりしながら道を歩いていく。街はほぼ全て西洋風にしてあって覚えやすかった。

話をしていると直に話のネタも無くなつていいく。  
俺は気になつていていた事を聞くことにした。

「ねえ、シャークティさん。

どうしてキリスト教徒になつたんですか？」

なぜキリスト教を信じたか。

それは一番興味が沸く物だつた。

魔法使いと教会は争つてゐる。犬猿の仲といつても良い。

教会にとつては『奇跡』を起こすことが出来るのは聖人だけであり

魔法使いは許される物ではなかつた。

魔法使いにとつては少し関わつただけでも一般人でも殺す教会はゆるせなかつた。

どちらも相手を認める事は出来なかつたし、

認めようともしていなかつた。

魔法協会と教会よりも魔術協会と教会の方がまだ仲がよかつたりする。

「……そうですね。

何でだつたんでしょう？ もう忘れてしましました

「え？」

今までいろんな人に聞いてきたが一番意外な言葉だつた。同じ事を言つ人も居たけれどそんなに数いなかつたし。  
そんな俺を見てなのか、シャークティはまた笑つていた。

それが気に入らなくて口をとがらせる。

「何か可笑しかったですか？」

「ええ、驚いた顔が可笑しくて。  
でもやつきの言葉は本当ですよ。本当に忘れてしまったんです」

……嘘ではないよ。そのくらい簡単にわかる。

「じゃあ、私も聞きますがなぜキリスト教を？」

「いやな」と聞いてくる。恥ずかしくて話したくないんだが、……

「どうしても話さなきゃいけませんか？」

「私にも聞いたじゃないですか」

わからない、って言つただけじゃないか。

「養父に憧れたんですよ。

以前危ないところを救われまして、そのときの養父の姿が格好良かつたんです。

養父のよ、養父のよ、って頑張つてたりじいまで来ました。

キリスト教に入ったのも養父が居たからなんですよ

「へえ……素晴らしい父親なんですね」

「ええ、最高の父親です」

それからはなにも話さず学園長室へ向かう。

学校へ着く。

冬休みなのだろう。校舎は静かで寒かった。

ぼんやりしながら進んでいくと思いついたことがあった。

「こきなりなんですが、なんで学園長室は女子中等部に有るんでしょうか？」

ピクッ、ヒシャークティが反応する。

「もしかして学園長先生はロツコンなんでしょうか？」

「や、まあ私には何とも。人が考えることなんて分かりませんの

シャークティの移動が速くなる。

彼女も俺と同じように思っていたようだ。それに前に違うところへ学園長室を移動させる計画を学園長が即行で却下したらしい。

「着きました。 じいが学園長室です」

学園長室についたらしい。 高そつた扉だ。 実際に高いだらう。

「私はこれで失礼します」

シャークティは入らないらしい。 セッキの話の後では入りにくいうつ。

また会いましょう、と言つて別れる。 去つていくときの速さは行き以上だつた。

今回の話はとても楽しかつた。

同じシスターでも毒舌シスターなんか比べものにならないくらいだつた。 むしろ比べたくない。

何というか、こう、母親的な感覚があつた。

いや、母親居なかつたからどんな感じか知らないけどね。 暖かい感じ。 また会いたいな。

## 2話（後書き）

調子に乗つてもう一話投稿。

意外と人が読んでくれることにびっくりです。

うちではシャークティさんがちょっと性格が違っています。  
そこらへんわかっていただけるとうれしいです。  
他数人も性格が変わっている可能性があります。

## 3話（前書き）

作者は頭が悪いです。  
ですので上手い話し合いは作れません。  
ご注意ください。

扉の方へ向き深呼吸する。

さつきまでの俺で居るとダメだと思つ。

話によると学園長は人間離れしているらしい。上司の話では狸だ、  
と言つていた。どんな存在なんだろうか。

比喩だつていうのもわかつてゐるけど。

腹黒いつてどのくらいなんだろう。機関長並みでなければいい。  
緊張しながらもノックしようとしたらノックする前に扉が開く。

「あ……」「ぶつー」

「.....」

「~~~~~つ！」

運が悪かつたとしか言ひようがない。

扉を開けたのは三十代の筈なのに四十代半ばのおっさんにしか見え  
ない高畑・T・タカミチだつた。彼が扉を開けた所為で俺のノック  
しようとした拳が彼の顔に当たつてしまつたのである。今彼は、顔  
を押さえてひざを突いていた。

「.....」

「.....あー、入らないかい？」

痛みが引いて余裕ができたようで頬がひきつりながらも笑顔で対応してくれる。実に痛々しい。

「じゃあ、失礼させてもらいます」

まだ痛いのか顔を押さえている高畠を見ながら部屋へ入る。部屋に入ると可笑しな生物（？）がいた。高畠の方を見て問う。

「What is this？」

「This is Narrarishyon」

「ひょつ！」

英語の教師をやつてるだけはあるすばらしい発音だった。いや、そんなこと話には一切関係ないけれども。返答に感謝しつつひざを突く。

「なんと言つことだ。日本では妖怪が人の上に立てるなんて！」

確かに人間離れしている。

だがこれは人間離れではなく人間とは種族の違つ生き物だ。狸どころの話ではないぞ。

「儂はぬうじひょんじや ないぞいー！」

化物が何か言つてゐるが気にしない。  
肩に手がおかれ。振り向くと笑顔の高畠がいる。  
その目は共感をふくんでいた。

「……大変ですね」

「ああ……」の頃間に穴が空きつつでね……休みたいんだけど……  
ね

言葉から大変さが感じ取れた。

可哀想だ……でも同情だけで手伝つ『気はせりせりない。

「本人の前でそれはどうなんじや らうか。  
終わりも近い爺をいたわろうとは思わんのか」

「あれ、まだ居たんですか。別にいなくてよかつたの」

「（泣）」

「氣持しあるからやめてください。後頭部切り落としまさよ」

「（号泣）」

俺と高畠先生の「コンボが効いたらしい。  
机に顔を伏せてマジ泣きしていた。

「……ホントにあれで大丈夫なんですか？」この学園

「うーん、どうだろう。今のところは問題は見えてこないよ

「すいぶんとこの学園はしつかり作ってあるんですね。驚きました

「うん、僕もそう思つよ

俺と高畠先生の爺いじめは続く。

「ウエールズまで聞こえてくるんですよ。狸爺のロココンだつて

「確かに。反論はできなーいなあ

「それによくこんな頭で人前に出れますよね

「本国の一部の研究所ではこの人の遺伝子調べてるらしいよ

「是非解説していただきたいですね」

「確かに頑張つてほしいね」

「じゃあ、遊びはここまでにして本題に入りましょうか。いい加減飽きましたし」

「えつ、遊びだったのかい？」

「え？」

修正……高畠先生は本気だったようだ。

「……」

「……」

沈黙は続く。

「……」

「……」

「本題に入りましょうか」

「そうだね、それがいい！」

何事もなかつたように本題に入ろうとする。  
だが、肝心の妖怪爺が泣いたままだった。

地味に心にきたらしい。

部屋の隅に体育座りしていた。  
うつとうしい爺だ。

「学園長先生いい加減にしてください。組織の長なんでしょう。この程度で落ち込まないでください」

「儂なんて……儂なんて……」

「めんどうかいなあ。……オラアッ！」

「グフツ！？」

妖怪爺はぐつたりしている。

流石に準英雄の拳は堪えたらしい。

実行した高畠先生はいい仕事をした、と言わんばかりの良い笑顔だった。

……いい加減暑くなつてきた。

着ていたコートを脱ぐ。

「……はつ、儂はなにをしていたのじや」

意外と回復が早かつた。

一応学園一の魔法使いと言つたところだろうか、回復力が凄い。  
いや、妖怪だからだろうか、やはり妖怪は地力が違う。

「どうしたんだい？ 話をするんだらう？」

少々おかしいのかもしれない。考え方を中心に集中しそぎだつた。  
……休まないとな。

「そうですね。この頃疲れてこるようだ」

「大丈夫か？ 体には気をつけないとけないよ」

ありがとうございます、と返事をしてソファーへ座る。鞄とコード  
はソファーの横に置く。

……む、柔らかい。良い物使つてゐな。  
高畠先生は学園長の横へ。

「なぜじゅうつか。腹が痛いの？」

「氣のせいですよ。ほつとけば治りますつて」

爺に対しての高畠先生の対応が冷たい。氣のせいではないはず。日  
頃から鬱憤が溜まつてゐるんだろう。

「では、仕切り直して。

儂が麻帆良学園学園長近衛近右衛門じや。や  
よひしへのう」

「メルティニア魔法学校卒業生レオナルド・アンデルセンです。よろしくお願いします」

「レオナルド・アンデルセン……？」

「一人の顔が歪む。話に聞いていた名前と違っていたからだろう。それに俺の姓は魔法使いにどつては敵の名前だからな」

「失礼じゃがレオ・スプリングフィールド、ではないのかのう？」

「それは田名ですよ。今では何の意味もないものです。今の俺はレオナルド・アンデルセンです」

「……」で一人の顔に違いが出てくる。

高畠先生の顔はさらに歪み、  
学園長は納得といった顔になった。

「そうか、そうか。わかつたぞい。

では、レオナルド君。君の修業は教師をやることじゃったな。じゃがネギ君と来る予定と聞いていたんじゃが」

「……せつと、学園を探りにきたと思われたんだが。任務もあるが

正直真面目にやる気がない。

それに、早くきたのは他のもつともな理由がある。

「早く学園になれたいな、と思つたんですよ。  
あいつはまだ準備中ですよ。予定通りに行けばいいと思つてゐるんで  
しょ」。

教師なんて初めてやりますし人に物をおしえるんですから。  
自分はやることなしつかりやりたいので中途半端にやるなんて嫌で  
すから」

「ほひ、眞面目なんじやな。良い判断ぢや」

理由がまともで学園長も困つてゐるらしい。  
言葉も乱さなかつたし、俺の性格も記されてるからだひ。嘘か真  
が分かぢづうこと。

「で、俺の担当るのはどうなんでしょう? いつかひつてから  
教えられると言われたんまだ知らないんですけど」

「おひ、君たちこひは教育実習生としてこの学校の2・Aを頼もうと  
思つどる」

「ううの2年ですか……」

女子中なのは微妙なところだが一年なのはいただけない。  
生徒を何だと思ってるのだらうか。  
受験生だぞ。たとえエレベーター式だとしても教育実習生に任せれる  
なんて事普通ならばしない。

「ん？ どうしたのじゃ？」

「いえいえ、何でもないですよ。  
ところで君たち、と言いましたが他の先生が補佐につくなどはない  
のですか？」

「他の先生は忙しくての。誰も補佐につけれないんじゃ。もともと  
2・Aはそこにいる高畠先生の担当での。じゃがその高畠先生は出  
張が多いのじゃ。じゃからちよづど来た君たちに2・Aは任せて高  
畠先生には他の仕事に集中してもらおうと思ったんじゃ

何言つてるんだろ？、この爺。  
それは理由になつてないだろ。  
もつとちゃんととした理由付けしろよ。  
普通は他の先生つけるだろ。本職の人間ではない奴らに一つクラス  
任せめるなよ。  
本当にこの学校大丈夫なんだろうか。心配だ。

「わかりました。で、役目の話なんですが。  
俺たちのどつちが担任で副担任なんですか？」

「それは担任をね」

「はあ？！」

本当に学校を何だと思ってるんだろうか。

お前らの箱庭じゃねえんだぞー！

……つと、ふざけた回答過ぎてキレてしまつたな。仮をつけて。

「学園長先生、続けてください」

「……わ、わかつたぞい。

担任をネギく じやなくてレオナルド君。  
副担任をネギ君にしてもらおうと迷つとる」

「やつですか。それはよかつた。

わつわネギと聞こえましたが聞き間違えだつたよ、やつです」

ちよつとばかり手に氣を集めたら直した。  
脅しには少なかつたと思つたけども、自分でもおかしこと思つて  
たんだね。

「あこつが来るまでは高畠先生はやつあるんですか？」

「高畠先生はともかく、やつが田張を頑張つてもやつ  
はつになつとる」

「やつですか、承知しました。修業を頑張らせていただきます」

「ふおふおふお……

では、住むところじやが……」

「ああ、それなら既に当てがありますので。

「気にしなくても大丈夫です」

「えつ？……それならいいんじゃが」

爺が残念そうにしている。気持ち悪いだけだ。さつむとでたい。そして新居を見に行きたい。橙子さん設計だからセンスはいいからな。ハズレではないと思う。とここで言つべき事を思い出す。

「あの学園長先生」

「なんじゅ？」

「俺は警備には参加しませんの」

「…………」

一人して驚いている。

どうせ何でそれを知つているのか、と言つたところだらう。

高畠先生からは殺氣が漏れ出している。

俺が裏に属している事なんて分かりきつたことだらうに。裏にいれば麻帆良の事だつて耳に入つてくる。知つてるのは当たり前の事なのだ。

むじゅうじゅうしてその程度思いつかなかつたのだらう。

「どういう意味か聞いても？」

「詳しく述べると魔法教師ではなく一般人の教師と同じ事しかしません、ということですね」

「それは困るのう。うちは万年人不足なんじや。やつてくれんかのう？」

「何的外れなこと言つてるんだろう。俺のやる氣はどんどん下がつていぐ。」

「なんでやらなきやいけないんですか？」

「なつ！」

今度は驚いたのは高畠先生だけだった。

「立派な魔法使いを目指すのならば当たり前のことだ！ 人を助けることが我々の本懐なのだから！」

徐々に眠くなつてきた。何を熱くなつてているんだろう。もつすでに話すのさえ億劫だ。

「もういいですか？」

俺早く新居見たいんでこれで失礼させてもらいます

置いていた鞄一つとコードを持って扉の方へ歩き出す。

「最後にお願いしたいんじゃが

出て行く前に今まで黙っていた学園長が話しかけてくる。

「なんでしょうか？」

「せめて、2・Aの子たちは守りましょう」

確かに俺たちが関わるのだ、危険が伴うだろ？  
2・Aの生徒を俺たちへの餌にしたりとか。

「良いですよ。一般人の生徒は守りましょう。  
ではこれで。」

そう言って扉を閉める。

中に入った二人は予想以上にダメだった。  
こんな事予測し得たことない。話にも穴があつたし。

これなら学園に頼る事はやめといた方が良いかも知れない。  
麻帆良についてはそれっきりにして家のことを考へることにした。

家を設計する際にしたお願いをしつかり守つてある事を祈りながら家へ向かつた。

儂は先ほどレオナルドが出て行つた扉を見つめる。  
隣ではタカミチ君が拳を握りしめていた。

「……学園長先生。  
なぜ最後にあんなことを?」

タカミチ君は問う。

なぜ生徒たちを守るようお願いしたのか、  
あいつを信用するのか、と。

「いんじゃよ、あれで」

後悔する様子もなく答える。

「儂等はなめすぎでおつたのかもしれない。う。

今まで集めてきた情報を聞いていても年相応以上の能力を持つていることは明白じゃった。

儂も脅しをかけてくるとは思わなんだ」

そう言つて担任の話を思い出す。

あれだけの量を苦もなく集められるのなら聞こえていた武勇伝も嘘ではないかもしない。

レオナルドの武勇伝は一人の耳にも届いていた。

テロリスト百名を殺さず倒し、それを自身は無傷でこなした。  
立てこもつた凶悪犯を説得した。

森で暴れていた竜種をたおした。

召喚された爵位持ち悪魔を倒した。

など嘘としか思えない物ばかりだつた。

儂等はそれらを嘘と決めつけていたのだ。

「予定よりも外れすぎていって穴ができていた事もわかつてはいたようじゃし。

流石は『アンデルセン』と言つたところじやな。

名乗るだけはある

ふおつふおつふおつ、と笑う。

だが笑つていられるほど余裕はなく心中では計画の修正案を考えていた。

元老院からの情報より実物はできる人間だった。

戦だけではなく政もできるタイプ。

理性で自分を律することができる人間。

もつとも厄介なタイプだ。

計画で一番の障害になるやも知れない。

「……もしかしたら殺すことも考へんといかんの?……  
タカミチ君そのときはやつてくれるか」

「…ええ、そのときが来れば」

唇を噛みしめていたタカミチ君が顔を上げる。

その顔に悔しさはなく決意と覚悟があつた。

それを見て机から紙を取り出す。

「では、修正案を考えることにしようかの。

……頭が痛いわい。こんな老人にやらせることではあるまい」

「はははつ、頑張つてください」

そうしてまつやうな紙に文字を書き始めた。

### 3話（後書き）

か……感想が欲しい。

感想や評価は作者のエネルギーとなります。  
書いていただけたら嬉しいです。  
むしろ積極的にお願いします。

感想、書き方に関してなどの注意をお待ちしております。

俺が新しく住むことになる屋敷は悪いところはなかった。

敷地内に落とし穴があつたり、

突然壁から槍が突き出できたり、

天井から大量の剣が落ちてきたり、

屋敷の下に地下帝国が有るなんて事もなかつた。

何かしら有るんぢやないか、とびくびく過ごす必要がなくなつたおかげで漸く休息がとれそうだ。

……百以上罠があつた。ふざけすぎだと思つ。でもこれだけ探したのだ、もう無いだろ。

だが設計の時子供連れた切嗣もいたし……

子供の要望も叶えたりしてゐかも……。

やめとこつ。

もつと不安になるような事を思い出さないよつに思考を停止させる。もう無いと信じたい。

屋敷の『表』の安全が確認できたところで持つてきた大きな方の鞄を持ち地下へ向かう。

屋敷の端にある隠し扉が入り口になつてゐる。

扉を開けると人が数人入れるような空間があつた。

床の埃を足で端へ集める。埃がなくなつたことで見えた魔法陣に血を垂らす。

血は即座に吸収され血に含まれている魔力を動力に魔法陣は動き出す。

うつすら光り出した陣の上に立つ。

陣を踏んだ瞬間、真っ暗に変わる。

いつも通りに右手の壁にあるスイッチをいれた。

カチッと言ひ音と共に空間が光で満たされる。

明かりに慣れて目を開くと目の前には人形が立つていた。

……目に光がなくて地味に怖い。

しかも人間に近づけてあるせいで死体が立ってるみたいになつて  
し。

「……相変わらず趣味が悪い」

人形にはメイド服が着せてあつてその胸あたりに紙が張つてあつた。

『これはお前にやる。  
今できているなかで一番の出来だ。  
見本にでも、何にでも使うとい。  
お礼は十億で勘弁してやう。』

お礼が十億つてぼつたくりだろ。

あの守銭奴め、知り合いの傭兵ですら知り合い価格で割り引いてく  
れるのに。

これなら自分でやつた方がマシだった。  
はあ、と溜め息をつく。

今日はため息つきすぎな氣もする。

人生で一番多い日だろうな、なんてくだらない想像もしてみてしま  
うほど今日は疲れている。

張つてあつた紙を細かく破いて燃やす。  
空間の中央まで歩いていく。

いろいろな機材があるがそれだけは毛色が違つた。

乳白色の床や壁と違つてすべてがガラスで作つてあるのだ。

六角形の柱が床から突き出している形になつている。

柱の窪みにあらかじめ受け取つていたダイヤモンドをはめ込む。

そしてこれにも血を付ける。

唸りをあげて柱が起動し始めた。

ダイヤモンドに籠められた魔力で敷地と外を区切る結界が出来上がる。

後は勝手にエネルギーを地脈から吸い取つて起動し続ける。

問題が無いかしつかり確認する。

工房作ったときに持つていた全てのものを費やして作り上げた自信作なのだ。

壊れたりしたら引きこもる自信がある。

転移の影響は馬鹿に出来ないし、地脈に合つてているかとか問題が起ころう理由はたくさんある。

問題無いことを見届けた後鞄を開けて中から人形を取り出す。

失敗作ではあるが完成品なので使つている。

問題点は機械と同じで命令通りにしか出来ないとこだらう。命令出来る事も少ないし。

まあ、まだ複数のことが出来るだけいい方だ。

一つのことしかできないものもあるし。

人形達を仕事に就かせ外へ出る準備をする。

出る前に陣の近くに置いてある机の引き出しから自作の煙草を数本取り出す。

一本残して残りはスースの内ポケットに入れて外に出る。

残していた一本に火をつけ紫煙漂わせる。

ここで注意だがこの煙草にはニコチンなど有害物質は一切含まれておりません。

育てている薬草や自作の薬を使い作つた煙草です。身体への影響はほとんどありません。

未成年者でも安心してお使いいただけます。

「……って誰に言つてんだろ……ぼけたかな？」

そつまつて空を見上げる。

見上げた空は曇り空で雪が降っていた。

時間は飛びまして夕方。

スーパーからの帰り道。

警察に注意されかねない煙草はやめ、片手に食材の入った袋を持っている。

スーツの上にコートを着て道を歩く。

俺以外の人は早足で歩いていく。俺にはひとつという事無いが寒いらしい。

地面には雪が少し積もつていて走れば滑りそうだ。

寒くも辛くもないが腹だけは空いていて何か食べたかった。

けれどたい焼きとか買つてないから食つものなくて、食つとしたら食材になるけれど野菜とか生で食つう物はなかつた。

こんな事なら店でたい焼きも買つとけば良かつた。

そんなくだらない理由だけど機嫌は悪かつた。

「楽しい事しようぜ～」

「結構です。離してください」

「よきや、断られてやんの、カツ「悪ー」

「うひせえよー」

クスクスと気持ち悪い声が聞こえる。

いつもなら見逃すのだが、今の俺は機嫌が悪かった。  
……運が悪かったな、男ども。

「だから、少しだけだつ へふううー」

「よきやー？」

女の子に声かけていた男が吹っ飛ぶ。

ぶつ飛んだ男はそのまま壁に埋まった。

男と女の子はなにが起ったのか理解できないようだ。

「中学生ナンパなんかしてんじゃねえよ。ぶつ飛ばすぞ」

この際既にぶつ飛ばしてるとか理不尽とかそんな話は無にしておく方向で。

実際ナンパはされていたから行動に矛盾は無いし。

「てめえ！ よくもよき あがつ！」

ぶちゅう、と音がした後殴りかかるうとしていた男が倒れる。

手は股間に置いていて白目を剥いていた。

男の大事な物を潰されて氣絶したようだ。

男どもを一瞥してまた歩き出す。

張り合いのない。もう少し頑張つて欲しいものだ。

今日は寒いだらうけどきっと大丈夫だらう。

死にはしない…………死ななかつたらいいな。

片方男としては死んでるけど。

「えつ、ちよつ、ちよつと待つてください！」

慌てたような声を聞いて振り返る。

女の子は結構な長身でポニー テールだった。

「ありがとうございました！」

女の子は勢い良く頭を下げる。

それに俺は手を振つただけでそのまま帰つて行つた。

余談だが

その後女の子は男たちの扱いに困り  
電話した同級生の言葉に従つて男たちを置いて逃げた。  
すでに通報された後だったので警察はすぐに来て男たちを連れて行  
つた。

その時点では関係者が居ないことが以外問題はなかつたが男たちにつ  
いて調べてみると強盗犯であることが判明。  
見事男たちは御用になりました。  
めでたし、めでたし。

## 4話（後書き）

今回は住居と工房の説明。ちょっとしたフラグたてになりました。

ここでお願いがあります。

今のところ作者が考えていいるヒロインは  
神楽坂明日菜、龍宮真名、近衛木乃香、桜咲刹那、絡繆茶々丸、大  
河内アキラ、となっています。

このうち絡繆茶々丸、大河内アキラのアーティファクトを考えて欲  
しいです。  
どうかお願ひします。

待つてまーす。

すいません。遅れたくせに量は少ないです。

いつも、レオナルドです。  
俺はいま学校に来ています。

えつ？ 前回までとテンションが違う？  
気にすんな。作者のノリで書かれてんだから。  
今はとっても気分が良いそうだ。

### 閑話休題

俺は三学期から教えることになる学校の下見に来ています。  
たしか2・Aだつたかな？

昨日家に送られてきたクラス名簿を見て思つた事があるんだよね。  
学園長なにがやりたいの？ つてとこかな。

1940年からいるつてそれつて幽霊じやん。

クラスの中に何人も魔法関係者がいるのはわざとしか思えないし。  
なんで魔族いるの？ 騒動は起こさないだろ？ けど。

学年の癖のある奴らを集めた感じだよね。

もしくは英雄の息子のために集めたのかな。  
本当に学園長ふざけてるよね。

……ふう。言いたい」と言つたら落ち着いた。

気をつけないとな。俺もまだまだだな。

落ち着いたところで職員室へ向かう。

学期が始まつてからでは遅いからな。何事も早めにやるべきだ。  
職員室はかなり広かつた。

学校に来ている先生もいて挨拶してくれる。

一般人のようで魔法先生はいなかつた。

机はまだ置かれてないようで今日は職員室の場所を覚えるだけで終

わる。

次に2・Aの教室へ。

野菜がこの学校に来ることを考えて結界を張らなければならない。  
内容は魔力吸收。これに魔力が集中したとき、と条件を付ける。  
これならば魔法の射手とかランクの低い魔法は発動できなはず。  
障壁とかは流石に消せないけれど戦場でもないのに発動してゐる馬鹿  
はいないだろう。

このために学園長のいない間に來たんだ。

考へてる間に2・Aに着いた。扉を開ける。

誰も居ないはずの教室に誰か居てその人はペン回しをしていた。

「は？」

「えつ？」

俺の声に反応してこちらを向く。ペン回しは止めない。  
居たのは少女で制服っぽいもの着ていた。  
……ペン回しつまいな。なかなかのものだ。

「……」

「……」

どちらも動かない。

この間に観察しておく。

少女は可愛い顔をしていて見覚えがあつた。

……あつ、クラス名簿だ。一番がこんな顔をしていた気がする。

観察を続けると重要なことに気がついた。

足がない。少女の膝あたりから下がなかつた。

幽靈なんだろう。70超えた女性がこんなに若い容貌だつたらおかしい。

とりあえず話しかけることにする。

「……えつと、相坂さん？」

ビクッ、と過剰な反応を示した。回していたペンが落ちる。

「み……私が見えるんですか？」

「ええ、見えますけど」

少し間が空けて相坂さんの目から涙がこぼれ出す。

それからは相坂さんを落ち着かせようとしたりしていた。

なんでも自分が見える人が居て嬉しかつたらしい。

自己紹介をした後二人で席に座つて話している。

「へえ。60年間ここにいるんですか」

「はい。でも誰も気づいてくれなくて……つう」

「ああ、もう泣かないでくださいよ。」

「俺が居るでしょ！」

「だつていままで誰も氣づいてくれなかつたんですよ。靈能力者とかお払い師も来たけど氣づかなかつたですもん」

「それはプロジェクトなかつたから氣づかなかつたんですよ」

「やうなんですか？」

「やうですか？」

「やう、ですか。……ですよね。私だつて氣づいてもらえますよね」

「…」

相坂さんはすごい燃えていた。

自信がついたのだろうか。勢いがある。

というか六十年間よく悪靈にならなかつたな。

普通ならなるものなんだが。

……今日のうちに結界はれるかな。

もうすでに一時間とちょっと時間がかかつてゐる。もう1~4時だ。

まだ時間はあるけど早めに張つておきたい。

爺が戻つてくるかもしけない。

少し焦る。どうやって話を止めようか。

……良いこと思いついた。

都合のいいときに閃く頭だと思つ。

「ねえ、相坂さん」

「？ なんですか？」

「自分の体欲しくありませんか？」

「え？ えええええ！？」

「欲しくないんですか？」

「も、貰えるんですか？」

「ええ」

俺は笑顔で答えた。

相坂さんも笑顔になつていく。

俺が結界を使うときはよく使う種類の結界は符で作つてある。  
今回のようなあまり使わない種類の結界はまず魔法陣を書くことから始まる。

常備している墨で天井に描き始める。  
描き終えたら陣に魔力を流し起動させる。  
魔法式でやつたらバーレるのでこれは魔術式である。

効果を試すことは出来ないが問題はなさうなので、認識阻害の札を貼つて魔法陣を隠す。

簡単だがこれは学園長に解除されないようじにダーリーの術式を混ぜてあるのでよっぽど魔術をわかつてないと解除は出来ない。

……手段を問わないなら天井ごと取つてしまえば良いだけの話だけども。

魔法使いは魔術師のこと馬鹿にしてるしな。

力を持つていてるの人に助けに使わず自分のためにのみ使う引きこもりだつてさ。笑つてしまつ。

話がそれたな。魔法使いは魔術師を馬鹿にしてるから魔術を習わない。だから魔術を使われると大概の奴らは気づけない。

最後に移動させた机を元の場所に戻す。

「よし。これで終わり、と。じゃあ行きましょうか」

「はい！」

相坂さんの返事はとても元気が良かつた。  
うん、笑顔もかわいい。

## 5話（後書き）

前回応募していたヒロインに関してですが  
少し考えてみたところ入れようとするにネギのパーティーが  
少なくなりすぎるので取り消しました。  
安易に応募してしまい申し訳ないです。  
瑠璃さんは応募していただきありがとうございました。

あと作者は学校が始まったので遅い執筆速度がせりに遅くなります。  
いろんな人に読んでいただき嬉しい限りです。  
途中で逃げるような事はせず完結を目指して頑張りつと思っています。  
これからもよろしくお願ひします。

## 6話（前書き）

頭が働かない。

遅くなつた上短くてすいません。

「す、いですねえ」

俺は相坂さんといっしょに工房へ来ていた。先ほど話したことを実現するためである。

トンネルを抜けると……のような反応と同じだと思う。入つてからずっと俺の失敗作やら機械とかを見て凄い、凄いと言つてくれている。

美少女に喜んでもらえるのは嬉しいことだ。

関係者以外で入れた女性は相坂さんが初めてだつたりする。でもこのままでは話が進まない。

「相坂さん。こひちですよ

あつちに行つたつこひちに行つたりしている相坂さんの手を引っ張る。

え、幽霊なのに触れるのか、だつて？

……そう。俺も驚いたのだが触れた。

人間としての感触もあつたからほんとに驚いた。肌は冷たかつたけど。

「あつ……」

残念そうな声を上げるが聞こえなかつた振りをする。だつていつまで経つても同じ事してそつだし。

「また後で見れますから我慢してください。初めにちょっと調べなきゃいけないことがあるんですよ。それにもつとすこい物もありますから」

「えつー！ 本当ですか！」

「本当ですよ」

俺からするとここにある物はそこまで田立つ物はないと思つ。出来上がつた銃剣とかをしまうところだしな。  
相坂さんを連れて奥の方へ歩いていく。  
魔法を使って空間を広げてるから端から端まで行くのに一苦労だ。いつも瞬動で移動するからか、距離は分からない。  
転移符を使ってもいいが勿体無い。

結局瞬動を使つたけど何事もなく目的の物の前へ着く。

「えつとー、これは何ですか？」

「地味だけど凄い物体です」

目的の物とはダイオラマ魔法球だつた。  
魔法球という名前だが目の前の物はガラスの箱である。

それが数個繋がっている形になっている。

正方形になっているのは彼と師匠である女性の趣味である。

「ちゃんと手を握つてくださいね」

「あ、はい」

手をしつかり握り魔法球に触れる。

二人の足下に魔法陣が浮かび二人は転移した。

「わあ、凄い！ すごいです！」

相坂さんはかなり喜んでいた。

具体的に言うと子供のように目をキラキラさせ凄い、としか言わないほど喜んでいた。

予想以上に喜ばれて苦笑してしまった。  
バチカンの孤児院にいた頃のようだ。  
つまり、子供を相手にしている感じ。

相坂さんを横目に見ながら進んでいく。

「相坂さん！ 着いてきてくださいね。  
着いてこないと迷うかもしれませんから」

「はいっ！」

本当に礼儀正しい子供のようだ。

着いてきているのを確認して倉庫へ向かう。

倉庫は地下にあり主に人形系の作品が入っている。

この屋敷の管理を任せている人形とすれ違う。

魔法球の中は初期の作品ばかりなので同じような顔ばかりだ。もつ  
たいなかつたので使つていい。

倉庫の入り口の前の階段で立ち止まる。

「はい」「はい」ですね

「この下にいくんですか……？」

「はい」

一人で階段を降りていく。

相坂さんがすごく嫌がつたので一人で降りることになった。

……幽霊なのに幽霊が怖いのだろうか。  
やつぱりしつかり意識があるからか？

倉庫から素体と小さな人形を取り出して上へ上がる。

「？ なんですかそれ？」

手に持った人形が気になつたらしこ。  
理由は顔がなかつたりするからだね!。

「これは相坂さんの仮の体ですね。  
使えるはずですから入ってみてください」

「え? 入るってどういう事ですか?」

「わかつやすへ皿つと『憑依』してください」

「憑依……ですか。やつたことなこんですけど」

「やつあへんは『氣合』で何とかしてくだせ。わつと出来ると想  
ます」

「氣合」ですか

うへん、と惱みながりいろいろ試してい  
るのうちに術式を書き込む」とこする。

「あつ、出来た」

……早いな。適当に言つただけなの。わ  
あつと素質があるんだらう。

今日は驚きの連續でした。

いつも通りにしていたら私のことを見る人が来た事。

その人が体をあげると言つた事。

糸もないのに動いている人形。

人のようにしか見えなかつたけどレオナルドさんは人形つて言つていた。

種も仕掛けも有るらしい。

広い部屋みたいなところに居たはずなのに一瞬で大きな湖の見えるところに来た事。

なんでも魔法らしい。時々学園で大きな杖を持つて歩いていた人が使つていたものかな。

最後に私が入ることの出来た人形の事。

本当に今日は驚くばかりでした。

レオナルドさんは遊んでいてくれつて言つていたから遊ぶことにしました。

感触も有るから楽しいです。

でもこの体は仮の物らしいです。

私が使うことになる体はもつといろんな事が出来るそうです。  
早く体が欲しいなあ。

## 6話（後書き）

質問ですが、俺は毎回一千文字程度で出してるんですけど短いですかね？

このままで良いでしょうか？

アーティファクトの募集はまだしています。  
感想もください。作者が喜びます。

## 7話（前書き）

ここでの魔術、魔法は作者の考えたものです。  
当てにはなりません。

素体に術式を書き込んでいく。

この作業が一番辛い。

今まで書き込んできた術式と書き込む術式が干渉しないように考えながら進めていく。

この素体は相坂さんの入れ物のため入れる必要はないが、他の人形を造るときは人形の行動についての術式も入れる必要があるためさらに難易度は上がる。

そう考えると今やっている物は簡単なものだと思つから人間の思考回路はおかしいと思う。

まあ、今やつてる根幹となる部分はいつもやる作業だからすりすりいけちやうんだけど。

それに、この頃数体つくりたからな。  
でもやっぱり辛いのは変わらない。

「……よし、出来た」

後は試運転だがこれは相坂さんがいないと始まらない。  
かかった時間は大体四時間。  
前にやつたときよりも短くなっている。

「……」  
この作業の時はダイオラマ魔法球はとても便利だ。

「相坂さん。出来ましたよー」

「本当にですかっ！ やつたー！」

70cm程度の高さの相坂さんが歩いてくる。  
ちょこちょこ歩く姿は微笑ましい。

顔とか簡略化されている事が微笑ましたを増幅させる。  
衝動に任せてしまわないように手の甲を握る。

「ははは、まだ完成した訳じゃないですから。  
後は試運転して問題がなければ微調整して完成です」

「わかりました！ 私、頑張りますっ！」

「はい、頑張つてください。  
では、その人形から出でてもうれます？」

「はい……よつと……えつと……えいー……出れました！」

何事もなく出れたようだ。

憑依出来たけど出れませんでした。

って言うのが一番予想できたんだが無事出れてよかったです。

……えいーつて無理矢理出た訳じゃないよな。

「じゃあ、今度は」ひたひた入ってください

「……コレに入るんですか？」

「はい」

素体を差し出す。

相坂さんは少しためらつた。

今はまだ凹凸も少ないから「コレでいいのか心配になるのもわかるけどね。

「……わかりました。……とつい…」

相坂さんが人形で飛び込んだ。

結果。

無事に動かせました。

入つたり出たりも問題ないようです。

「わあ、すごいですね！ レオナルドさん！」

感動してくれたようだ。

そりや、のっぺらぼうが人の形に変形したら驚くかもしれない。  
俺は相坂さんの純粋さに驚く。

今は動きが悪かつた膝と指の微調整をしている。  
あとは髪を黒に変換するようにしたり。

黒の方が大和撫子っぽいよね。外人の偏見だけじゃ。

「よしぃ。これで完成です。入つてもいいですよ」

「ありがとうございますー！」

すつ、と中に染み込む感じで入つていいく。  
初めは飛び込んでたからかなりの進歩だと思つ。  
いらない話だけど憑依つて着ぐるみ着る感じらしくよ。 やつを話を  
聞いた。

「わーい。楽しいですー。嬉しいですー！」

はしゃいで腕回したり走り回つたりしてこる。

「へやつー！」

あつ、転んだ。

「はしゃがないでくださいねー。

壊れないでしようけど壊れたら大変ですから」

「はーい！」

……本当に子供じゃないかと思つてしまつ。

これで70幾らのばあさんなんだぜ。

あり得ないけど。若すぎるけど。勿論精神的、肉体的にね。

ふう、と息を吐き出す。

懐から煙草を取り出して火をつける。

息を吸うと紫煙が肺を満たした。

前に注意したように健康には問題ないからな。

ただ肺が黒くなつていいくのはどうにもならなかつた。煙草の形では灰ばかりはどうにもならない。

俺のような人間そつくりの人形作れる人限定で肺を作つた肺に取り換えるという方法もある。荒技だけどな。

俺は一週間に一度取り替えるぜ。

こんな時にも使える便利な技能だと思う。

義手も作れるし。式さんは橙子さん製よりも俺の作った物を愛用してくれている。

コンセプトが丈夫で、でも出来る限り人間に近い物だつたしな。

あの時は橙子さんは機嫌が悪くなつて修行が大変だつた。

おつと話がされた。

相坂さんはまだ走り回つてゐるが、見る限り問題はなさそうだ。

閑話休題。

後は幽霊時代の感覚を抜く必要があるだらう。

足の動きが遅すぎる。幽霊は足無いしな。

今後の予定を組み立てながら立ち上がった。

7話（後書き）

本日2話目。

感想が欲しい。

シャークティと美容がらしくない

レオナルドです。

今日は教会に来ています。

昨日は来れませんでしたから。

一応キリスト教徒なので来ないとね。

「おはようございます。レオナルド君」

「シャークティさんじゃないですか。

おはようございます。シャークティさんも祈祷に？」

「ええ。それに明日はミサがあるのでその準備に」

この教会でもミサはやるらしい。

魔法使いの本拠地でよくやる物だと思います。

その前に信者はいるのか？

「こまかよ。60人程度ですね。ミサにはよく来てくれますよ

「そりなんですか？　ここにもいるんですね。  
つて、あれ？」

俺言葉に出したか？

「いえ、言葉には出してなかつたですよ」

「まだ。魔法を受けてないと思つんだけど。

なにがおきたんだ。読心術対策はしてあるんだけど。

「ふふふ。女性には秘密がたくさんあるんですね」

「そつなのか。聞いてみたいけど聞いたらいけない気がする。

「どうあえず場所使わせてもらつても良いですか?」

「「「ゆうべつせいか。寒いですから体には氣をつかへください」」

「そうじつて奥に入つていぐ。

邪魔になるなら家でも良いかなと思つたけど、

良いなら使わせてもらおう。

磔にされたキリストの前に膝を突きを祈禱を始める。

十数年間ずっとやり続けてきた行動なので体に染み着いていた。  
ここ数日祈つてなかつたからな。

立ち上がり服装の乱れを直す。

祈祷の間ずっと緩めていた意識を元に戻す。

そこで後ろで椅子に座っていたシャークティさんたちを見つける。

「素晴らしい集中力ですね。話の通りでした」

「どんな話だつたんですか？」

「最も純粋に祈りを捧げる信者、と聞いています」

「それは嬉しい噂です。でも噂ですから。

嘘ばっかりです」

「そうですか？ 私には噂通りだと思いましたが。ねえ美空。 そう思いませんか？」

「え、ええ。 そうだと思いましたけど」 「…す」 かつた

「だそうです」

「ははつ。まあいいんですけどね」

シャークティさんは「口一口したままだつた。  
その噂なら親父の方が相応しいと思うけどな。  
世界中探してもあれほどまでに神に仕えている人はいないだらう。  
長引いても面白くない話なので誤魔化しに入る。

「どうでやの二人は？」

「うちの教会で修道女見習いをしている子たちです。美空、挨拶を」

「春田美空です」「…」「」

「レオナルド・アンデルセンです。これからもたびたび来ると想つ  
のでよろしくお願ひします。

特に春田さんはよく会ひ」となるでしようから」

「え……なんでスカ」

「それは私が新学期からあなたのクラスを担当するからですよ」

「え……マジですか？」

「ええ、マジです」

「良かつたですね、美空。良い担任が就いて」

なにがショックだったのか、春田さんは「…」の格好をしていた。

そんなに嫌なのか。まあいいんだが。

「シャークティさん、いやシスター・シャークティ。私はこれで失礼をせてもらいます。では」

「はい。また会いましょう」

挨拶をして教会から出る。

まだ冬の空気は冷たくて頬が痛かつた。

「シスター・シャークティ。わたくしのつて……」

「ええ、あなたの想像通りだと思いつますよ」

「……『断罪者』」

「すげー。『天使』<sup>Angel</sup>が担任とか、すげー」

美空は相棒であるココネの言葉も聞こえてないようですげー、とぽかり呟く。田は暗かつた。

「有り得ないとしか言いようがないつすね。学園は分かつて許可したんす？」

「そのようですよ。この前魔法先生を集めて彼が来る」とを言つてましたから。……まあ学園長も学園長ですが魔法先生たちも同じようなものですね彼の噂を全否定してましたから

「うわー、そりゃないつすね。シスター・シャークティはどうするんですか？」

おそらく噂は本当のことなのだ、と教えるか、否か。と言つたところでしょうね。

「なにもしませんよ。どうせ信じません。

それに法皇さまからも黙つていてくれ、とわざわざ手紙が届きましたし

「えっ！ それも驚くつすね。あとで見せて欲しいつす

「いいですよ。それこそどなれば教会へ寄ればいいのですから」

「……どひひのキョウカイからも文句言われません？ 呪われたくないっす」

「呪われたらいい神社教えますからそこへ行きなさい。ここには本当の友達は少ないですから別に気にしません」

「そんなんだから偉くねないので？」

「それは望むところです。13課のマクスウェル副機関長を見てみなさい。中途半端に偉くなつたものだから執務室から出てこれなくなつたそうですよ」

「それは嫌つすね、と美空は乾いた笑いをする。

：かわいそう、と「ココネも続く。

ココネは優しい子ですね。

頭をなでておく。するとほんせりとした目でこひらを見つめてくる。

：可愛い。持ち帰りたいぐらい。

：気持ちが和む。だけど今日は和んではいけない。

「さて、ミサの準備をしますよ美空、ココネ。しっかり働いてもらいますからね」

えー、と美空が嫌そつに返事をした。

：いらっしゃ、ときたので叩いておく。

頭を抱えて泣いている美空を引きずつて礼拝堂の奥へ歩いていった。

## 8話（後書き）

今日は教会内のお話でーす。

あんまり面白くなかったかもです。

作者はセリフか地の文のどちらかにしか集中できない人間だつたり。

感想お待ちしています。

## 9話（前書き）

これまでおかしこうじがあるかもしません。  
おかしこうじを見つけたら感想に書いてほしいです。

教会から家までの帰り道。

途中で買った缶コーヒーを飲みながら歩いていた。

缶コーヒーも時々飲むには良いよね。

後は急いでいる時とか。

ちびちび飲んでいると無くなってしまった。

満足そうにしながらゴミ箱を探す。

ゴミ箱は近くの公園の中にあった。

距離は22、3メートル。短いけれどまあいいだろう。

空き缶を持った右腕を振りかぶり狙いを定めて……投げる！

空き缶は一直線にゴミ箱にはいった。

……なにやつてんだろう。

少し冷静な俺がいたが気にしない。

遊んだところでまた帰り始める。

飲む物もなく、暇をつぶせる物がなくなつた。

暇をつぶそうと先ほどの教会を思い出す。

「あの教会結構良い空気だつたな。

さすがにバチカンにある教会と比べるのは馬鹿のやることだけど」

おそらく神父の人まだ居るのだろう。

奥で寝ていたか、作業をしていたか。もしくは眠らされていたか。

どれでも良いけどね。いなくては良かつたのは事実だし。

神父に会つと何故か毎回声をかけられる。正直言つて面倒くさい。でも笑顔で話して帰る。関係を悪くしたくないからね。

おそらくあの教会の頂点にいるのはシスター・シャークティだらう。

本人は否定するだらうけどね。

「まあ、そんな事はどうでもいいかな。  
関わりはほとんどないし」

口に出して言つ。すると少ししてから今まで見られていた気配があつたのが消えた。

学園長め。こんなガキに大人げない事するなよ。  
魔法で見張るとか、どうせ家の中が見えなかつたから外出たとき狙つたんだろうけど。

魔法程度で俺の結界を抜けのものか。

特にあれは技術の塊だしな。たとえどんな熟練の魔法使いがやつと結界を抜くことも壊すことも出来ないだらう。

そういう風に作つたんだから。さすがにミス・ブルーとか宝石翁など『魔法使い』にはきかないかも知れない。

宝石翁は抜く方向で。壊せるだらうけど。

ミス・ブルーは壊す方向で。あれ相手に壊されないだけの結界作るなら魔法使いにでもならないと無理。

と、そんなことを考へてゐるうちに家に着いた。

そのまま魔法球まで入る。  
たしか出る前に相坂さんには動き回つとくよう言つといたけど、ひなつてるかな。

「ひやふ、たのしーです〜」

とっても楽しんでいました。

別の魔法球にいたはずのゴーラーンに乗つて走り回つてました。  
……あの駄馬俺は乗せなかつたくせに。良い度胸してんじゃねえか。  
まあ いらないからいいんだけど。

「あつ、レオナルドさん。帰つて來たんですか。見てください！  
私馬に乗れてるんですよ！」

「そうですね。そんなに氣に入つたんならあげましようか？ 僕は  
乗せなかつたんでいるんですよ」

「いいんですか！？ ありがとうございます！ 大事にします」

「それはよかつた。だけどこの魔法球の中だけにしてくださいね。  
外に出したら捕獲されますよ」

「えつ、やうなんですか？」

「いや、こんな角の生えた馬なんて見たことがないでしょ？？ 角  
が無くても外見が良いですから捕まえられて好事家に売られますよ。  
もしくは研究所ですね」

「そ、そだつたんだ」

知らなかつたのかよ。間違ひなく少し常識がずれてる。

「なので遊ぶなら」の中で遊んでください。良いですか？」

「はーい……」

残念そうだ。まあじうしょうもないけど。でも、幻想種はまとめて入れてあつたはずだからそつ簡単に入ろうとは思えないんだけどなあ。

たしか生きてでれる確率が17%なんだよね。よく生きて出てこれたよな。

……聞いてみるか。

「相坂さん。その馬がいた所つて危ない生き物がいたはず何ですけど大丈夫でした？」

「はい、大丈夫でしたよ。黒い大きなトカゲさんが運んでくれました」

「え？ もう一回言つてもらえます？」

「黒くて大きなトカゲさんが運んでくれたんで大丈夫でした」

ドラゴンエ……。

なんでそんな簡単に懷いちゃつてるの？

幻想種でも上位の生き物がそんな懷いちゃつたらダメでしょう。

それなら簡単について来るわ。

黒いドラゴンなんて一匹しかいない。

この頃生態系の頂点に立つた突然変異種。

俺ですらギリギリ勝てる相手だし。

「それは良かったですね」

「はー。」

うん、元気があるのは良いことだ。でも行動が遅すぎると、僕もう疲れちゃったよ。パトナシショモヒコだっ。

「僕は少し疲れたので寝させてもらいますね。」この中で好きじゃなくて、いい

「いってください」

「はーい。今一歩ありますよー。G O O D。」

相坂さんは猛スピードで駆けていった。

……さて、寝室行へか。

数時間ほど眠り魔法球を出る。

相坂さんはさらに周りの動物を増やしていた。  
どうでもいいかな。諦めよう。

たとえペガサスがいたとしても。  
狼とウサギが一緒に寝ていたとしても。

黒龍が周りを囲んでいても。

気にならない。というかあいつら俺より懐いてるし。

「なんか、朝無くしたストレスが今まで以上にたまってる気がする」

「独り言を呟くぐらい疲れても大丈夫だ……と思いたい。いや、  
思わせて。

……性格が崩れてきてるなあ。

今俺はストレス解消のため朝、空き缶を捨てた公園で煙草を吸つて  
いた。この際寒いのは我慢できる。というか感じない。

……とりあえずストレスは少しずつ無くなっている気がする。

……この頃『……』と『気がする』を使いすぎる『気がする』。ま  
た使つてしまつた。気にならないけど。

そんなくだらない事考えていると子供に囲まれた女の子?を見つけ  
た。

買い物袋を持つて子供数人に囲まれていた。  
なんとなく追いかけてみる。

数十分後。

良い子だね。この数十分間に

- ・道に迷っていた老人に道を教える。
- ・滑つて尻餅ついた人に手をさしのげる。
- ・陣痛の始まつた妊婦を病院まで一緒に行く。
- ・ブレイクダンスを始めた爺を諭す。

などやつていた。

え？ 一つ変なの混じつてゐるし、妊婦の件は手伝わなかつたのか、だつて？

妊婦は手伝つたよ。タクシー呼んだだけだけど。

一緒に病院までついていつたし、その妊婦の親御さん呼んだのも俺だし。

なんでも夫となる男は事故で死んでしまつたんだつて。空気が一気に重くなつたよ。

俺と女の子？は親御さんに礼を言われて戻つて行つたんだ。その後自己紹介して話してたらブレイクダンス爺を見つけたんだよ。俺が抑えて女の子が諭したんだ。元に戻つたら良い爺さんだつた。

で、今。

女の子と教会の近くで猫に餌をやつしています。  
何でだらうね。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもないですよ。気にしないでください」

「？ わかりました。そつ言われるのであれば気にしません」

「あつがとハヤリゼコモア」

女の子 級繩さんは猫たちを撫でる行動に戻る。  
「ハシヒコルヒタケハガイノイドヒテいたが人間と変わらない  
と思ひ。

無表情の状態が多い女の子。やつ考えれば当たる。  
しかも、今は少し笑つていた。

「可愛いですね」

「？ ああ、猫の」とですね。一般常識で言えばかわいいのだと思  
われます

「違ひますよ。級繩さんの」とです

「私が……ですか？」

「ええ、級繩さんが、です」

「そんなこと無こと思われますが」

「それは自分のことがわかつてないだけです。級繩さんのハシヒ一般  
常識では貴女も十一分に可愛いですよ」

「はあ……」

「まあ、じつへつ考えてみれば良こと思こますよ。時間はあるんで  
すから。

では私は帰らせてもらいます。もつねりそろタ食の準備をしなければ

ば

「 セウです。 セウなりです」

「 セウなり。 そつだ。 明日もここに来ますか?」

「 はい。 その予定ですか?」

「 では、 また明日もここに来ても?」

「 私はかまいません」

「 セウですか。 ではまた明日」

確認をして歩き出す。あと、数時間で夜になるだろ。相坂さんは別に食事は取らなくても良いからな。取らうと思えば取れるけど。

「 レオナルドさん!」

「 は?」

後ろから絡繰さんの声がする。振り向いて彼女を見る。

「 私の」とは茶々丸と呼んでもらってかまいません」

……驚いた。余つたばかりの女の子にやさな」とを言われたるとき。  
クスッと笑つ。

「また明日会いましょう。茶々丸さん」

「ええ、また明日」

また歩き出す。今日は良い気分で帰れそうだった。

「……どうしたんだ、茶々丸。いつもよりも豪華じゃないか。今日  
はなにかあったか？」

マスターが驚きの声を上げる。

そんなにいつもどがうでしょつか？

「いえ、今日は何の記念日でもありますか？」

「ちがう。なにか良いことがあったのか、と聞いているんだよ」

なにか良いことがあったか、ですか。

今日はレオナルドさんと会つた以外いつも通りでしたが。

「……まあいい。美味しい料理が食えるのは良いことだ。詳しことは聞かん」

マスターはいつも通りいただきますと言つて食べ始める。  
私は食べられないで座つているだけです。

ふと、レオナルドさんに言われたことが気になつた。

「マスター」

「ん？ なんだ」

「私は可愛いのでしょうか？」

「は？」

マスターは驚いていた。

……珍しい顔です。保存しておきましょー。

「茶々丸、それは誰に言われたんだ?」

「今日知り合つた方ですが」

「そいつは男か?」

「はい」

「ふーん……」

「どうかされましたか?」

「いや、なんでもない。可愛いがどうか、だったな。可愛い、とうよりは綺麗だな」

「綺麗ですか?」

「ああ。外見としては綺麗だよ。……可愛いと言われたのはどんなときなのだ?」

マスターに可愛いと言われるまでを大まかに説明する。

「猫を撫でているとね……なあ

「はい」

「うへん……なにが可愛いのか……うへん」

「どうでしょうか?」

「全くわからん。普通なら綺麗だ、といつぱりが……その男の感覚がずれてるんじゃないかな?」

「やうですか」

結局、答えはわからぬままでした。

でも、明日また会えるので気にしなくて良いかもしだせん。  
また明日聞いてみましょつ。

9話（後書き）

茶々丸ですね。茶々丸かわいい。

春秋は感想を待っています。

「がいいとか、『が悪いとか書いてください。  
直す努力をします。

なかなか評価があがらない。俺がだめなのか。

嗚呼、文才がほしい。

どうも、今日の朝は教会へ行かなかつたレオナルドです。何で行かないのか？それは場違いだからね。

行くわけには行かないのさ。

それに昔機関長と一緒に外で布教してたら機関長に一般人と一緒に祈るな！って怒られたからなんだよね。

というわけでミサのある今日は行かず外を歩き回ることにしました。相坂さんの調整も終わつたしちょうど暇だつたんだ。相坂さんは魔法球で幻獣たちと遊んでるよ。

この頃は魔法球の幻獣すべてが相坂さんの言つこと聞いてたよ。俺よりも上位にされてたし。

いらない話だつたね。忘れてくれよ。

服装は全身真っ黒。その上からいつものコートを着ている。

今まで無茶してきたせいか温度についていまいち感覚が鈍い。

戦闘に使える他の感覚については鈍くなつてない。むしろ鋭くなつてている。

犬には負けるが嗅覚は人が相手にならないくらいすごい。

他の視覚、聴覚は人並みはずれでいる。

温度以外の触覚と味覚が普通より上程度だ。

と何でこんな話をしたか、なんだが。

これらのおかげで人捜しとかはとても得意なんだ。それが望む、望まぬに関わらずね。

「やあ、久しぶりだな。レオ」

「直接会つのは何年ぶりだつたかな？ 元気そつで良かつたよ。マナ

ナ

彼女と会つのは戦場が良いかなと思つてたんだけどな。

俺から見えるとこことはマナからも見えると言つことだからね。視力については彼女の方が上手だ。

「私も会えて嬉しい。なら何で逃げたんだ？ 教えてくれないか？」

とつてもイイ笑顔で聞いてくる。答えたくないなあ。

「それは君が美しくなつていて驚いてしまつたからさ。まさかそんなに成長してるとは思わなかつたんだ。絶世の美女と呼ぼうか？ それとも傾國の美女のほうが良いかい？」

「じゅうじゅ葉も褒め言葉だらつけど私は美しさで國を傾けるようなことをする気はないかな。

絶世の美女の方でお願いするよ」

「す」いね。自分から絶世の美女と呼ぶよつて言つ女性は君が初めてさ

そして一人で笑いあう。こんな戯言にもしつかり反応してくれる人は少ないからありがたい。

話しながら近くにあつたベンチへ座る。

マナも

「で、なんで逃げたのか教えてくれないかな」

マナは俺に体を近づける。そして俺のわき腹に銃口をあてる。顔は笑顔のままだが目が真剣マジだった。顔がひきつるのがわかる。

「だからマナが美しくなつていたからだつて」「嘘だな」……

女性はなんでこんなに鋭いのだろう。嘘なわけでもないんだけどな。言われなれてるから嘘だと思つていいのだろうか。

「綺麗になつたと思つてるのは本当なんだよ。それは真実さ」

予想以上に綺麗になりすぎていたから驚いて見つかつてしまつたんだから。

「む……」

「それでね見たとき顔が真っ赤になってしまったんだ。そんな顔を見せるのは恥ずかしかったからね。逃げてしまったわけだ」

「嘘……ではないな。綺麗、か。嬉しい」と言つてくれる

マナは顔を赤くしていた。最後の方小声で聞こえにくかつたな。なにいつてたんだろ。

聞かないけど。數を探つて竜を出す気はない。

「「」なんどこりで話すのも何だから家に来ないか？ 外は寒いだろ？」

「家があるのか？ 来たばかりと聞いていたんだが「

あの爺、やつぱり事前に知つてたな。

まあ、どうでもいいことだ。

「有るよ。そこそこ広い洋館なんだけどね。お茶とクッキーぐらいない出せるよ」

「杏仁豆腐はあるかな？」

「無いけど作るよ」

「じゃあ行かせてもうりおつかな。レオの作る物はどれも逸品だからね

「そんなに褒めてもうりえむと嬉しいね

そうして家へ行くことになりました。

前をいくマナが嬉しそうにしていていいなって思つ。

家の一室。

主に客をもてなす為にある部屋。

今が初めて使うけどね。客なんてこないし。

そもそもこの洋館 자체あんまり使ってない。

魔法球があるから休みの間は使う必要がない。

客人はあらかじめ電話してくるように言つてるしね。

話は戻つて今俺とマナは部屋にいる。

俺は紅茶を飲んでいて、マナは俺が作った杏仁豆腐を食べていた。  
杏仁豆腐は三杯目である。

「……ふう。腕が上がったね。店で出せばすぐに人気商品になると  
思つよ」

「そんな気はないな。本職が忙しいし。それに俺には異端殺しして  
る方がお似合いだよ」

「そんなこともないとは思うんだけど……まあレオの自由だな。私  
が決めることではない」

「ありがたいね。俺としても今の仕事の方がなにも考えなくて済む  
からね。」

そつと紅茶を一口。冷め始めるけど合格点だと思つ。紅茶に  
拘りはない。ミルクティーもレモンティーもそのままでも飲む。抹  
茶、珈琲、緑茶などどんな飲み物でも飲む。珈琲は眠気覚ましに良  
いし。

拘りすぎるのは馬鹿がやることだ。英国人はまずい料理ばかりな  
に紅茶には拘る。

そんな拘るなら料理もうまいもの作れよと思う。

そこで残念なのは俺も元英国人である事だろうか。村の料理は美味  
かつたのにロンドンで食つた飯は不味かつたしな。  
ここで終わつといつ。

しかし、俺の考えはすぐに横道にそれるな。  
何でなんだろうか。

「レオ。あの後どうしてた?」

「えつ？ もう一回語ってくれるか？」

「別れた後はどうしてた？」

「別れた後か……主に仕事かな。詳しきは話せないけどなかなか充実した毎日だった。

マナの方はどうだった？」

「私は……」

今まで手紙だから書けなかつたことなどを話していく。  
話は夕方まで続いた。数年ぶりに会つたのだしこういう時間は悪くなかつた。

途中俺がマナを残して教会に行つたりしたけど問題はなかつた。茶々丸さんはまた来ることを約束して帰つてきた。前回可愛いと言つたことについて聞かれたが可愛かつたから可愛いと言つただけなんだけど、なにか問題でもあつただろうか？

帰つてきたときマナに女の子と会つてきただろ？、と聞かれてびっくりした。女性は男にはないなにかを持つているのだろうか。  
話しているうちにマナの門限が近づきマナが帰る事になつた。夕飯もご馳走したかったのだが……残念だ。

一人で道を歩く。冬は空気が澄んでいて夕陽が綺麗だ。

よし、ここまですべて母音を a で終わらせていくや。

「で、次は学校で会うことになるのか?」

「ああ? もしかしたら戦場かもしれないし今回みたいに町中で会うのかも知れない。運命はわからないよ。でも一番確定のは学校で会うことだと思うけどね」

「やうだな。ではレオはどうで会いたい?」

「教会でシスター服着てる君に」

「あり得ないな。バイトとはいえ私は巫女をやつてるんだ。巫女にそんなお願ひしないで欲しい」

「シスターも巫女も同じ神に仕えるものじゃないか。変わらないよ」

「神道が良くてもキリスト教が駄目なんじゃないか?」

「ははは。その通りだ。……今田は楽しかったな。」

「私もだよ。相変わらずレオが作る料理は美味しい」

「それは良かった。頑張ってる甲斐がある」

しばらくの沈黙が続く。嫌いじゃない静かさだった。

「 もうそろそろ帰つても良いぞ。寮もすぐそこだ。」

「 もうか。じゃあ、また」

「 ああ、またな」

そう言つて別れた。俺もマナも笑顔で別れる。

別れるときは笑顔で別れるのが一人の中での約束だ。

前回はマナは泣きながらだつたが今回はちゃんとした笑顔だつた。

俺は来た道を戻つていく。太陽も半分沈んだ。

「 しかしなあ……」

わつきの笑顔を思い出して顔が赤くなる。

何度も言つが綺麗だつた。昔も綺麗だと思つたがここまでなるとは思わなかつた。

……顔を洗おう。そうすればもとに戻るはず。

そう考えて足を速めた。

## 10話（後書き）

作者の勉強がヤバいので今度から投稿が不定期になります。  
それでも一週間に一回は投稿するつもりです。  
身勝手でいいません。

マナと会つてから二日後。  
少し面倒なことがありましたが無事過ごしています。  
なにがあつたのか？

相坂さんの戸籍作つたり、相坂さんが学校通えるように学園長に話に行つたり、女子寮に結界はつたり。  
学園長が相坂さんの登校に関して煩かつたからマクスウェル直伝の交渉術でおはなしをしておいた。

住所はもちろん俺の家。

話の間中高畠先生が睨んでたのが気になつたね。  
なにか？俺のことを教会から改心して立派な魔法使いを目指してるとでも思つてたのかな？

あり得ないね。そんなご都合主義、マンガやアニメでしかやつてないよ。

俺つて立派な魔法使い代表のナギ・スプリンングフィールド大嫌いだ  
マギスティル・マギ  
し。

人殺しを素晴らしい事にするなよ。

元老院つてあの混乱に紛れて魔法使つて帝国民の洗脳やつてたみた  
いだし。第2皇女も洗脳済みなんだよね。

自国民を殺した奴を英雄扱い。笑えるよね。

人型の生き物は都合があつたとしても仲間が殺されたら都合があつたから仕方がないなんて考えられないよ。この場合は戦争を止めるためだつたから仕方ない、かな。

帝国の国境付近の住民と奥の方に住む住民は考え方が違つらじいよ。  
あつちのキリスト教徒が頑張つたらしい。  
つと横道にそれた話をストップしよう。

いま俺は教会から帰つてからの一度寝から起きたところです。

昨日は徹夜してしまったからね。

この頃は1日三時間睡眠が当たり前になつてきた。

七つの大罪に『怠惰』があるけど気にしない。もともとひやんとしたキリスト教信者ではないしな。

俺なんかを真面目なキリスト教信者としてしまつたら真面目な信者に殺されちゃうよ。

それはさておき魔法球は便利ですよね。一時間で24時間睡眠とれるんだから。

この頃は相坂さんは話もしていない。

相坂さんは見るもの全てが珍しく見えるみたい。

今は全ての魔法球を回つてたはず。

最近気付いたらしいけどポルター・ガイスト現象が起こせないらしい。靈的な物は相変わらず見えるようだけど。

殻があるからやりにくいだろうね。

あれは幽霊の魂から出る魔力が伝わつて動かせるらしいから。ぼんやりとした意識の中そんなことを考へる。

寝起きは意識がはつきりしない。

かなり強力な殺氣を当てたら意識はすぐに覚醒するけど、それがで起きる人はいない。

ある程度目が覚めたところでベッドの横にある机に置いていた眼鏡を取る。細工済みの眼鏡だ。

橙子さんと一緒にテンションで作った作品だつたりする。

くだらない機能もあるが長年使つてる物。用途は意識の切り替え。眼鏡かけると意識は大体起きるけど少し寝てたりする。

麻帆良にきてから表面の性格が変わってきた。何でだらう。これも麻帆良に来たせいかな。

後は顔洗つたりすると完全に目は覚める。

いろいろやつた後に魔法球から出る。

一日たたないと出れないのが多いが俺のはそんな欠点は無くしてある。

今日は麻帆良を歩いてみることにした。  
今まで三日前も同じことをやろうとしていたナビマナと会つたから無くなつたし。

「す」「いなあ。流石は世界樹って言われるだけはある

今俺は世界樹の前に来ています。

他のところ？ 作者が急げたんだよ。

知りたかつたら原作の13時間目を見てね。

この作品の主人公はメタ発言なんか気にしないよ！

気とかいろんな物を使って駆け上がる。目指すは天辺。

浮遊術なんて使わないよ。風情がないじゃないか。ところで風情つてこの使い方でいいのか？

10分程度で到着。意外と時間がかかったよ。

真上にある太陽がきつい。

頂上からは地平線まで見渡せる。西洋の町並みをした麻帆良は良かつた。

用事もなくなつたので下に降りてまた当てもなく歩き回りつゝと思つ。

今は麻帆良から出でてきています。

一日中認識阻害を抵抗したり、外に出でる間中監視されるのは気が滅入る。

それで大本の結界消したり、爺消したりすると殺そうとしてくるだろうから面倒。

だから外に出てくるんだけどね。

久々に気にする物もないから楽だね。

人ごみも結構好きだつたりする。人が生きてるつて感じがするからね。

「誰かそいつ捕まえて！」

後ろから大きな声がした。

何かなつて思つて振り返つてみる。

何かを抱えて走つてるような男とそれを追いかけているオレンジ色の髪をした少女。人ごみが裂けるように道ができていた。

スリかな？まあ状況からして少女の鞄を男が盗んだ、つてところだろう。

とりあえず男を足を払つて倒す。弁慶の泣き所蹴つておいたから走れないだろ。……やりすぎたか？なんか呻き声が人間ぽくない。

「はあはあ。……ありがとうございます！」

「ははは。気にしなくて良いよ。人助けは気分が良くなるからね」

なかなか良い性格のようだ。この頃は挨拶も言わない奴が多いからね。

「明日菜～。捕まえたん？」

黒髪の少女と人の良さそうな女性が走ってきた。  
息切れしている。結構走ったんだろうな。

どうやらこの少女はアスナと言つらしい。  
……アスナ？ まさか神楽坂じやないよな？

あの後男を警察に引き渡し、少女たちとお茶をする事になつていた。  
さらに彼女たちの奢りになつていた。

男としてはあまり嬉しい。男性が女性に送るべきだと思つ。

しかもそれらは勝手に決められていた。

まあ、終わったこと言つても仕方ないんだけどね。

「本当にありがとうございました。人ごみでなかなか追いつけなくて」

「別にいいですよ。それに紅茶まで奢つて貰つてるんですから二つ  
ちもありがとうと言いたいぐらいです」

「ほんによかつたわー。レオナルドさん良い人やね」

二人とは自己紹介をした。

オレンジの髪のほうが神楽坂明日菜。

黒髪が近衛木乃香。

マジでターゲットだつたね。せつかく仕事のことなんか忘れていた  
のに。さつき小さな気弾を飛ばしてみたけど途中で消えたんだよね。  
十中八九アスナ姫だよ。でも報告やめとこうかな。面倒だし。  
2人は注文したチーズケーキで話が盛り上がっている。

若いつていいね。元気が溢れているようだ。

ホント若いつてすごいよね。俺でも自分からストーカーなんてなれ  
ないよ。

「レオナルドさんはなにやつてるんですか?」

「俺? 俺は……教師予定ですかね。麻帆良で教師やるんですよ。  
教育実習生としてですが」

「へえ、奇遇やな。うちたちも麻帆良通りとねんや。エリの担当になるん?」

「確かに女子中で一年生のAクラス担当ですね」

「えつ? 私たちのクラスじゃない! じゃあ高畠先生はどうなるのよ……んですか?」

「無理に敬語使わなくていいですよ。年も近いですし。高畠先生は出張が多いからそつちに集中してもうつって学園長が言つてました。でも俺はどうかと思うんですけどね」

「なんでなん?」

「だつて、教育実習生に一クラス担任させるなんて正氣の沙汰じゃないからですよ。一年でこの時期ならもつとちゃんとした先生がやるべきです。来年は受験生なんですから」

「でもうちの学校はエレベーター式よ? そんなこと気にする必要ないと思つんだけど」

「Hレベーター式でも受験生は受験生です。高校入つてから勉強に困るなんて事になつたら大変じゃないですか。勉強は人生に関わりますから」

「やうなんやー。考えたことなかつたわ」

「今から考える必要はないですが基礎が出来てない人なんて社会では不要です。」

君たちはまだ時間が有りますからしつかり考えて自分で選んだ道を

行けばいいと思いますよ。

……面倒な話しましたね。御馳走様。これで俺は帰らせてもらいました。奢ってくれてありがとうございました

財布から五千円札を取り出し机において早口で逃げるよつこがる。何で逃げてしまったんだろう。逃げる必要なんて無いの。」

頭がチクリと痛む。

ああ、そうだ。いうこと言つたからだつた。でも必要なことでもあるんだけどね。

あの子たちは知らないうちに魔法に巻き込まれている。

知らせて選ばせるのも一つの手だけど知らないまま生きさせるのもいいと思つ。

俺には出来なかつたけど彼女たちならばできる可能性もあるだらうか。

……だめだな。こつち来てから感情が大きくなつてゐる。氣を緩めすぎたかもしない。子供の頃のようだ。

昔の自分はもう無くなつたと思つてたのに。

昔に戻れるはずもないのに。

一つ目です。

彼女たちと別れた後家へは向かわざ麻帆良の中にある森へ向かつた。考えてみたが報告するのまだしないことにした。

せつかく何ヶ月も観察できるのだ。やつといて損はない。移動には瞬動を使って行く。もちろん人には見つからないようだ。たとえ麻帆良全体に常識が変わるほど認識阻害がかかつているとはいえ見つかってもいいわけではない。

森の中へどんどん進んでいく。進むごとに雪が厚くなつていく。今は誰とも会いたくなかった。

進んでいると水の音がした。周りを見渡すと小川を発見した。小川をたどつていくと水の音が大きくなつていく。

岩が増え木の数が減つていった。

木が無くなつたときそこには滝があつた。

「滝か……精神統一にはちょうど良いな。川の流れもそんなに強くないし」

岩には何かの動物の足跡や草鞋のような足跡があつたが気にしない。足跡は昨日雪が降つてなかつたから残つていたのだろう。まだ12月だからかなり冷たいかもしけれない。けどそんなこと気にせずコートの脱ぎ川へ飛び込む。鈍いはずの感覚でも冷たく感じるのだからそうとう冷たいに違いない。

息を吸い込み水の中へと潜る。

水中に生き物は少なかつた。雑魚ばかりだ。

川底になる程水の勢いは増していった。

深いところや浅いところなどいろいろなところがあって泳ぐのも一苦労だ。

息継ぎのために顔を出す。水に濡れた髪をオールバックにする。少し後に髪の一部がたつ。

どんな髪型にしてもアホ毛ができるので髪型の選択肢が減る。ポマードやつてもなるから諦めている。

少し時間がたつたころ岸へ向かって歩き出す。

水は鳩尾あたりまでだから歩くのに問題はない。

岸へ上がり魔法で服を乾かす。ついでに体も暖める。

魔法はホントに便利だ。魔術だと準備も面倒くさいから。辺りに結界を張り川辺に寝転がる。田を閉じても水の流れる音、風で木の葉が擦れて鳴る音。

いまここは外から切り離されている。

空間遮断ができるわけではない。ただ音を遮っているだけだ。

だから外の音は聞こえず内で鳴る音しか聞こえない。

そのまま田を閉じていると睡魔が襲つてくる。俺はそれに抵抗しなかつた。

目を開けると空は少し朱くなっている。

腕時計を見ると四時頃。今から帰れば五時頃だろうか。急いで帰れば完全に暗くなる前に帰れるだろ。う。

起き上がりコートを着ようとする。

すると森の中から何か大きな物が歩いてくる音がした。さくさく、と雪を踏む音がする。

影の倉庫から銃剣を取り出す。

一本ずつ両手に持ち戦闘準備は完了した。

森の中から現れたのは大きな熊だった。冬なのに起きているなんて珍しい。

ならば来たときに見つけた足跡はこいつのだろうか。餓えているのか大きさに対しても少し細かった。

俺が観察していると熊は吠えた。よく聞く犬の鳴き声など比ではない。これは威嚇しているのだろう。

野生にしてはなかなか知恵がある。大概の動物なら襲いかかってくるのに。

熊は様子身をしていたがどうにもならないことをわかつているのか逃げようともしない。

もちろん逃げたら後ろから銃剣で殺すつもりだった。

熊は溜めを作り始める。俺も銃剣を構える。

両方とも動き出さない。先手ではなく後手を狙っていた。だがその静寂は長く続かず熊が先に動いた。

勝負は一瞬だつた。

俺を銃剣ごと押し潰そうとするように両腕を前に出して飛びかかった熊。

それに対し俺は少ししゃがみ右手の銃剣で熊の左腕をはじき残った左の銃剣で熊の頭を突き刺しただけ。

俺は突き刺した銃剣を離し前へ駆ける。

熊の下を通り抜け怪我も負わず血も浴びずに勝負に勝つた。

右の銃剣を見る。また頭が痛くなつた、がすぐに治る。そしてまた

銃剣を見る。

「……ふう。駄目だな」

銃剣には真ん中からひびが走り折れそうになっていた。  
それを地面の岩に投げつける。

銃剣は刺さることなく当たった瞬間折れた。  
たつた数日でこんなにも錆び付いてしまった。  
鍛錬は欠かしたことはない。なのにこんなにまで腕が衰えた。

「鍛え直さなければ……」

実戦で鍛えられたのだ。実戦が一番良い。なるべく殺し合いに近い  
ものを。

いや、実戦でなくても良い。あるレベル以上の戦いでも良かつた。  
殺した熊を影の倉庫に入れる。その際一本の銃剣も回収しておく。  
戦うのならば全力で出来なければいけない。  
鍛える方法と戦う方法を考えながら山を下りた。

もう辺りは暗かつた。既に六時は越えている。

結局だれかを13課から呼ぶのがうまい方法かもしれない。

時々頭が痛くなるせいで思考が止まる。

そのせいで歩きながらも考え方には止まらない。

「レオナルド・アンデルセンか？」

人通りもなく、暗くなつた通りで声が響く。

拙いが結界も張られていて一般人は絶対来ない。まるで闇討ちのようだ。

「ええ、確かに。私はレオナルドと言います。  
で、こんな暗い中何の用件で？」

いつも通りを装つて返事を返す。だがその声には感情がこもつてなかつた。

通りの先に一本だけ灯りのついていない街灯があつた。その下に大きな刀を持つた少女がいた。顔はわからない。刀はあの大きさから

して野太刀だらうか？

「……なぜ木乃香お嬢様に近づいた？返答次第では……」

「なにをするので？まさかその立派な得物で斬る、とでも？怖いなあ」

「ふざけて返事を返す。やっぱり感情はこもっていない。

「ふざけるな！何の目的があつたか聞いているだろ？！」

「目的などありませんよ。偶然です。運命で必然だつたりするかもしれませんが」

目的など無い。人助けをしたら会つてしまつただけの仲なのだから。でも、そんな」と言つても信じてはくれないだろ？

「……まあいい。斬ればわかる

「問答無用ですか……」

「はっ！」

少女は猛スピードで突撃してきた。

俺は焦ることなく情報をまとめる。

武器はおそらく野太刀。身長は低め。攻撃方法は野太刀に気を纏わせて戦うと思われる。

俺の攻撃範囲外だと思っているのだろう。

少女は俺の2m手前で止まり突撃の勢いのみ刀を抜刀した。勿論この程度の攻撃ならば軽く避けることができる。

十分殺せる隙だが見逃す。少し遅れて銃剣を一本取り出し投げつけた。鉄甲作用は使わない。

「ふんっ！」

銃剣はたたき落とされる。

少女は速度を上げ斬りかかってくる。

袈裟、唐竹、刺突、薙ぎ、逆風、切り上げ

いろんな角度から野太刀が俺を襲う。

俺はすべて紙一重で避け一定の距離をたもつ。

今までに隙は結構あつた。でもその隙をつけない。

女子中等部の校舎の方を見る。

さつきからずつと監視されていた。それは今も変わらない。なるべくこちらの手を見せたくない。

理想は話し合いで解決、だが無理だろう。

ならばすでにばれているだろう方法で戦う。

今度は一本黒鍵を取り出す。

少女はそれを見て笑つた。

「無駄なことを！ そんな剣で打ち合えるものか！」

「打ち合ひ気なんてあつませんよ」

黒鍵を指で挟みこんどは鉄甲作用は使って投擲する。

「はつ、だから効かな いつー？」

黒鍵も銃剣と同じように落とそつとしたものだから力負けして派手にぶつ飛んだ。

やつぱり黒鍵の方が鉄甲作用がよく効くな。バランスの問題だろ。頭痛がひどい。そのせいださつきも少し投げる場所がずれた。頭が上手く働かない。

また隙ができる。一際強く頭が痛くなつた。だが気にしない。すぐに止む。今回は隙を見逃すつもりはなかつた。

銃剣を倉庫から取り出す。

取り出したそれを少女に向かつて投げる。

銃剣は少女の頭と心臓を狙つて投げた。心臓のほうは一本だ。これで少女が死ぬことを幻視した。なにか想定外なことがない限りの確定事項。

そのことに不満がわいてくる。

本来ならばこの程度の監視など気にしないだろう。なのに監視を気にしそぎてしまった。それに何故俺は未だに殺そうと思えない？頭痛はさらにひどくなる。頭が割れそうだ。

勢い良く飛んでいく銃剣は動けない少女の急所へ刺さる。 前に三発の銃弾が邪魔をした。

「戦闘中失礼するよ

邪魔をしたのはマナだった。少女の体を貫くはずだった銃剣は悉く撃ち落とされていた。

マナは俺と少女の間に入った。

……やめるか。止めてくれるなら断る必要もないし。  
むしろありがたかった。爺どもの計画にはまるところだった。頭に血が上りすぎた。そんなことも忘れてしまったなんて俺らしくない。

「た、龍宮一 なぜ止めるー！」

少女はなにか言っている。……#あい。もつ殺る気がわからない。  
「刹那、落ち着くんだ。彼は敵ではない。私が保証する。だから今は剣を引け」

「だがつ……！」

「後でしつかり話すから、な？ 今は止めるんだ。」

「なあ、マナ。俺は帰つても良いか？ まだ夕食を食べてないんだ。  
腹が減つている」

「……帰るなら部屋を貸してくれないか？ 少し話がしたい。お前にも、こいつにも

どうやらなにか話がしたいらしい。別に良いけどな。今はテンションが低いし頭が痛いからやる気がでなくて途中で飽きる」とは確實だ。

……といひでの少女はなんで話しかけたときからいつも睨んでくれるのだろう?

「いいよ。俺は早く飯が食いたい。腹が減つて死にそうなんだ

「そりゃ、ありがとう。飯なら私が作つてやろうつか?」

「熊捌ける?」

「無理だ」

「ならいい」

そう言つて家へ向かつて歩き出した。

まだ頭痛はやんでなかつた。

## 1-2話（後書き）

今日はこれで終了。

本作品初めての戦闘シーン。

戦闘表現苦手です。どうでしょつか？

今日は明日菜、木乃香、刹那との出逢いですね。

プラスから始まる出逢いとマイナスから始まる出逢い。二種類です。少々順調に行き過ぎですかね？

感想待っています。意見の方もね。

家についた頃には頭痛も和らぎ最悪だった機嫌は少しづらくなっていた。

熊を捌いたり料理の準備をしている間にも機嫌はほんの少しづつなおつていく。

そして食事。

「……つまりこの子 刹那は近衛木乃香嬢の護衛で教会所属の俺が麻帆良に来たことに不信感を抱いていたら、愛する木乃香嬢と俺が接触していたから勘違いしたと」

「誠に申し訳ありませんでした！」

「はつはつはつ。まあ怪我も少なかつたし良いじゃないか。レオもそこまで狭量じゃないだろ？！」

家の食卓で三人で話していた。

前には料理が置かれている。森で狩った熊で熊鍋だ。

位置はマナと刹那が並んでいて俺がその前に座っている。

怪我は刹那の頬に切り傷があつただけ。

本来なら頬の肉根刮ぎ持つて行くぐらいの勢いはあるんだけどなあ。

「もうそろそろいいかな？ まあ俺も普通にしそぎていたし悪いのかな？ 今更だけど」

「いいんじやないか？ 十分火は通つてゐるが」

「本当に申し訳ありませんでしたー。」

「もうここのよ。気にしてないから。

ちよつと戦う相手が欲しかつたし。才能はあるから後は良い師匠と日々鍛錬を続けていけば一流になるでしょ。あとマナ。お前は鍋に集中しちぎだろ」

「……本当にですか？」

「うん。ホントホント。嘘言つ意味ないし。

おー、マナ。肉ばっかり取るんじやありません。野菜も取りなさい」

「熊の肉は初めて食べたんだが美味しいな。刹那も食べてみると良い」

「えーと、じゃあいただきます」

「好きだけ食つてね。でも太つたからつて俺に文句言わないでね

「嫌なこと言わないでくださいー。食べづらくなるんじやないですか

！……」

「まつまつまつ」

「お前は笑つてんじやねーよ」

「あ、美味しい」

「不味いもの食わせてびつかる

「レオ、もうすぐ無くなるんだが」

「あー、はいはい。新しいやつ持つてくれる」

「もぐもぐ」

「刹那、そんな焦らなぐても次があるよ」

「はつー、あう」

「……かわいいな」

鍋はみんなでつづくのが美味しいよね。  
一緒に食事してると仲良くなりやすいけど向でだらうね

食後。三人の前には空の鍋が五つ置いてあった。

「食つた、食つた。美味しかつたなあ」

「確かに美味しかつたです」

「わすがはレオだよ」

「適当いやつたのに美味しかつた」と「びっくりだ」

「「適当だつたのー?」」

「「うそ、適当」」

「.....適當で何で」「んなに美味く.....」

「刹那しつかりしる。」これがレオだ」

「ひどこじと書つねえ」

お前が書つた、である。

「文句あんのか?」

地の文まで読むなよ。

「なにに反応してんですか?」

「気にしないで良い。よくあることだ」

「やつぱぱつ裡たち酷こよな

「えつと、『めんなれ』。

「私はこつも通つだりやつへ。

「泣くよ。俺泣こむやつへ。

「泣けばこいんじやないか？」

「えーと、あはは

「絶望した！ 料理喰つておきながら俺に冷たい一人に絶望した！」

世界は甘くなかった。泣かないけど。でも慰める振りだけでも欲しかった。

「えーと、大丈夫ですか？」

「全然大丈夫じゃない」

「面倒くせこな

「どうしたら機嫌よくなってくれますか？」

「……じゃあこれから時々練習相手になつてよ。ひとつじや出来ないことがあるんだよね」

「それぐらこだつたら私程度でよければ良いですよ」

「じゃあ、機嫌直すわ」

「ガキと大人の話しあいみたいになつてるな」

「これから杏仁豆腐つくりねえぞ」

「一回だけ半額で仕事を聞いひ」

「やつぱつナチだな」

「あはははは……」

ほのぼのとした時間が続く。

練習の時間を決めたり、みんなでトランプやつたりね。まるで修学旅行のようだぜ。行つたこと無いナビ。話したりして楽しんでいるとマナが真剣な顔で話しかけてきた。

「なあ、レオ」

「どうかしたか? マナ」

「お前今何かおかしくないか?」

「？ ビジが？ こつも通りだと御づさだが」

「……そつか」

「俺そんなにおかしいか？」

「いや、何でもないんだ。私の勘違いだひつを

「ねひひだを

「マナはそう言つて黙つてしまつ。そんな風に言われると氣になるんだが。俺がおかしい、ねえ。

「私は帰らせてもらひつ

「あ、じやあねー」

「では私も失礼して」

「それ却下

「何ですかー？」

「まつせつせつ。本業アコントになつてあたな

「龍宮もやんなこと言わなくとも良じー。」

「まつせつせつ」「ひまつせつ」

そうしてマナは帰った。最後に冷蔵庫にあった杏仁豆腐取つていつたけど。

なんであそこまでこだわるのが不思議だよ。

いつの間に杏仁豆腐があることを知ったのだろう? 教えた覚えないよ。

「して、私に何か用事が?」

「あー、うん。いろいろ聞きたい」とがってね

「なんですか?」

今まで緩めていた顔を引き締める。頬杖もやめ正座する。俺につられて刹那も正座する。

「君、木乃香嬢の護衛なんだよね?」

「はい」

「何でそばにいないの?」

「つー」

「一般人にはわからないだろうけど、随分と拙い追跡だつたよ。剣使つんでしょ? だつたらその方法は向いてないかな」

今日、昼のとき思ったことだつた。見られているのがわかるつえ居場所まで分かるくらいだつた。

一番の目印になつたのはあの野太刀の入つた竹刀袋だつた。あれはずいぶんと目立つ。制服姿だつたしね。

「それは……」

「父親が娘には知られたくないと思つてこるんだよね

「な！ なんでそれを！？」

「すぐにわかる情報だよ。矛盾はしてゐなばい」

「矛盾？」

「うふ。だつてさ、魔法がバレたくないのになんで魔法協会の敷地内に送るの？」

「あ……」

「うう。しきも数ヶ月後には英雄の子供までくる。そんな状態でばれない方が有り得ない。

「まあそれだけじゃないんだろうね。詳しくは聞かないけどね。次の質問させてもらひよ。

では……あんな風に影から見守るのはお前に問題があるからだろ？

「……なぜそれを？」

刹那は動かない。だがその小さな体からは殺気が漏れていた。

「やつぱつにかかるんだな？」

「は？」

「嘘だよ、嘘」

「う、そ？」

「そ、う、嘘。こんなにも引っかかるなら交渉事はやらない方がいいな」

「…………」

刹那は両手をついて落ち込んでいた。

こんなにも引っかかるなんて、刀を使う者は嘘がつけないのだろうか。

「まあ、反応からしてこれがお前の中でかなり重要な秘密だとわかる。だから詳しくは聞かないし誰にも話さない。それでいいか？」

「……助かります」

落ち込んだ状態から復帰する。復帰したがまだ顔は暗い。

「……帰つても良いですか？」

「いいよ。じゃまた明日家に来てね」

「……わかりました。……では」

「バイバイ」

刹那はそれから暗いままで帰つて行つた。  
精神的に弱すぎるだろ。あの程度に引っかかったからつて自己嫌悪  
激しそぎ。

「……帰り大丈夫かな？」

少し不安になつてきた。送つてやればよかつたかな?  
家に俺以外居なくなつたところで仮面を止める。

家に帰つてから……いや、刹那と戦つてゐる途中から思つていたこ  
とがある。

それを確信したのはマナが聞いてきたからだつた。その時点でおか  
しいのだが。

今日の俺は今までから考えて明らかに異常だつた。

有り得ないほど落ちた技術、いつもならば後悔しないであろう言葉、

選択肢を与えない考え、襲いかかられたとはいえ殺すことに疑問を持たない思考、容易く他人を受け入れてしまったこと、いつもなら考えられないほど幼稚になっていた先程、そしてそれらに疑問を持たない自分自身。

何かが働いているとしか思えない。絶対に何かから邪魔されている。だが自分にはどうしようもない。そのことに苛立つた。

このことに気づけたのはカソックを来てから。つまりこの妨害は対処できるのだ。方法はわからないがいろいろ試す必要がある。だが明日には忘れているかもしれない。

遠距離で俺の思考を操作できたのだ、記憶を操ることも出来るかもしれない。

ならば思い何かにこのことを書き残しておいつとペンと紙を取り出す。

今まとめたことを書きこうとした瞬間。

刃物でも突き刺されたかのような痛みと共に暗転した。

今日一つ田です。

セリフ多めで地の文少なめの今回

14話（前書き）

8 / 26 学園長との電話 追加

部屋には人影が4つ。一人は笑顔、一人は無表情、一人は不安げ、一人はわかつていなさそうな顔で。

「…………」

「…………」

「…………」

「コールです」

不思議そうな顔だった一人がカードを晒す。カードはスペードの10、J、Q、K、A。ロイヤルストレートフラッシュだ。

「…………ふう」

笑顔の人は息を吐き出す。そしてにつこりと笑い口を開いた。

「負けました」

「あははは、また勝っちゃいました」

両手をつき悔しそうにするなか、隣にいた無表情の子が笑顔の人のところから全ての「メイン」を勝った少女のもとへと動かす。笑顔の人の前に落ちたカードはスピードのストレートフラッシュが揃っていた。

「じれでさよさんは8連勝ですね」

「……なんで私勝てないんでしょうか」

「すうい楽しいですねっ！」

「それはさよさんだけだと思われます。ああ、レオナルドさんもでしうか」

「ははは。負けて楽しいわけ無いじゃないですか」

「いつもですね。でもさよさんは強すぎです。神様が応援でもしてるのでしうか」

「ですかねえ。刹那さんは何回で終了しましたつけ？」

「3戦目で終わつたかと」

「絡繰さんそれ以上言わないでください。すうい傷つきます

四人はレオナルドの提案で始まつたポーカーで遊んでいたのだった。

結果はさよ以外の全員が全て取られて終了した。

「ばばぬき、大富豪、七並べ、ダウト、ポーカー。頭を使うゲームではレオナルドさんが。運のゲームではさよさんが全て勝ちましたね」

「いや、最初にやつた大富豪は無しですよ。あればさよさんがルールわかつてなかつたですから。ルールわかつたとたんさよさんが勝ち始めたじゃないですか」

「ポーカーは運の方が強かつたんですか?」

「一回田でロイヤルストレートフラッシュ揃つてたら勝てませんから運のゲームでしょう」

「よくわかりませんけど楽しかつたです」

「そうですか、それはよかつた」

「つなるまでの説明。回想へ。

「じゃあ今から説明しますよ」

「いえ、学級で見たことあるんですけど名前は知らないで……」

「見たこと無いですか？」

相坂さんは知らないようだった。戦時についたのかわからないしな。

「トランプ?」

「これはトランプですね」

魔法球で休憩中の相坂さんのこの言葉から始まつたと思つ。

「これなんですか?」

ばばぬきのルールを説明中。

「……とこりう感じですかね」

「へえ、面白うですね」

「まあ面白いでしょうけどやるには人がいないんですよね」

「そうですか……残念です」

「……なら人集めて来ましょうか?」

「できるんですか?」

「外は……だいたい朝の10時ころかな。うん、大丈夫です。でも相坂さんの知らない人になるでしょうけど……どうしますか?」

「ぜひ、お願いします!」

「わかりました」

そう言って立ち上がった。

その後一人を呼んでゲームを始めた。

勿論さよさんの事も説明したぜ。

その時なぜか知らんが名前で呼び合つようになつたけど。

「しかし、レオナルドさんが敬語なのは不気味ですね」

「なにを言つてるんですか、私は敬語が基本ですよ」

「私は敬語しか聞いたことはないのですが」

「私もです」

「じー、と見つめられる。

どうやら一人は敬語じやない状態の俺がみたいらしい。

「そんなに真剣に見ないでください。恥ずかしいです」

「ダメですか?」

「何の話ですか?」

「……どうやら無理のようです」

「諦めた方が良いと思つます」

諦めてくれたようだ。タメ口なんて親しい人にしかしないことを決めているんだよね。

三人が集まつて話しているのを少し離れたところから眺める。

タイプの違う三人は仲が良くなつたようだ。

計画通り進んでくれて助かる。新学期知り合いがない状態で始ま

るのは可哀想だからな。

「レオナルドさん！」

さよちゃんが話しかけてきた。  
何か話し合っていたようだから三人で俺に何かあるつもりなんだろう。

面白い。受け取立とうじやないか。

「なんですか？ さよさん」

そう言って宣戦布告を聞く。

Prrrrr Prrrrr Pi

「もしも、アンテルセンですが」

『レオナルド君か？ わじじや、わし』

「俺に鳥類の知り合いは居ないはずです」

『……近右衛門じや』

「で、なにかよつですか？」

『今度の日曜日の夜、世界樹前広場に来て欲しいのじや』

「断ります。では」

『ま、待つんじや！ 刹那君がどうなつてもいいのか！？』

「……あの子に何の関係がありますか？」

『刹那君は先日君を攻撃したじやう。だから罰せなれば他への示しがつかん』

「つまり、俺が行かなければ刹那は罰を受け、俺が行けば罰はなくなる。そういうわけですね」

『やうじやな』

「行かなかつた場合の歸は？」

『木乃番の護衛をやめてもひめつかと思つとむ。周りに喧嘩を売る  
よつじや護衛としてはだめじやからな』

「アリですか」

『「つむ、それで来てくれるかの？」

「……行かれしょ」

『「そつか、そつか。良かつたわい。あ、あと血口紹介もしてこつて  
くれ」

「わかりました。代わりに刹那の行動についてには他言無用で」

『「あい、わかった。今度の日曜日に世界樹前広場じやだ」』

「ええ、わかりました。ああ、すいません。もう一度刹那の事は誰  
にも言わない、と言つて貰えませんか？」

『「疑つておるのか？ わしが言つたことを知るわい」

「なら、ちやんともつー回呼びつけてだせ。併るならこの程度簡単  
でしょ」

『「む、……わかった。『わしが刹那君の今回のことは誰にも話さん  
……これでいいじゃん』

「ええ、ありがとついでござました。では日曜日

$p_i$

一つ田です。

日常回。

手抜きじゃないよ。  
やるよんすごい。運強すぎですよね。

ときどき俺がなにしたいのかわからなくなってくれる。

今日は麻帆良の細かい道を把握しに散歩へ行こうと思つ。

今日は珍しくカソック姿です。この前シスター・シャークティが力ソックで歩いてたからね。

自分も着てみることにした。これからよく着るつもりだからね。

街の路地を通りていく。所々に魔法陣を書き込みつつ進む。全部を線で繋ぐとさらに魔法陣が出来るように書き込む。薄暗い行き止まり。そこに最後の魔法陣を書き込む。これで完成。街の造りが魔法陣に向いていたから他の町でやるよりも簡単にできた。チョークを倉庫にしまつ。

「……後は時が来るのを待つだけか」

踵を返し行き止まりから出て行く。

通りに出ると休みなだけあって人通りも激しかった。

バチカンも毎日人が訪れていた。バチカンでは案内をしたこともある。近頃行つてないから今年には行きたい。

バチカンの幻覚を見たところで現実へ意識を戻す。この頃よく行つている世界樹へ向かうことにした。

世界樹はいつも通りそびえ立っていた。

天へ枝を伸ばし、葉は日の光を喰らい下の影を暗くしていた。

今日は快晴で雪は殆ど溶かされていた。

広葉樹のようなのに葉を落とさないのは何故だらう。気にはなるが

深く考えない。だつてそういうものなのだから。両世界合わせても10本も無い植物なのだ。そして人工的に新しく育てようとしても枯れてしまう。そんなものを調べられるものか。

わからないならわからないでいいのだ。人間に理解できるものではない。

そう結論づけて煙草を取り出す。赤いラインが入ったものだ。この頃は会う人が多かつたから吸うことが少なくなっていた。人に迷惑をかけない、それが俺の喫煙者としての矜持だ。世界樹の根に座る。歩きながら煙草を吸うのは好きじゃない。煙草を吸つてはいるうちにぼんやりしていく。

カチッと音が頭に響く。

この特別な煙草も俺のスイッチの一つである。精神的なリセットのスイッチ。ストレスとか苛つきを30分かけてリセットする。そんな機能を作り出した。リセットが始まると意識もぼんやりして来るから歩きながらも吸うことはできない。

世界樹の下で煙草を吸つてはいると黒髪が上ってきたのが見えた。

「あれ？ 近衛さん。急いでますね、どうかしました？」

「あ、レオナルドさんやん。いやむりといふこりあつてな

「そりなんですか。でもその着物は素晴らしいですね。振袖でしたつけ？」

「あはは。うちにもわからんわ

「ははは。わからないならじょりがないですね」

「ややなあ。つてこりんな」とことりる場合や無かつた。どないしよ、  
」のまほじや捕まる……そやー。レオナルドさん、レオナルドさん」

「なんですか？ いろこり悩んでたよつですけど」

「レオナルドさん運動できぬ~。」

「人並み以上には」

「なら、助けてーな。うち実は追いかけられとるんや」

「木乃香さまー！？」

「あかん。来てもーた。なあなあレオナルドさん」

「追いかけられてるのは本当のよつですね……良いですよ。手伝い  
ます。でも後でしつかり理由を聞きますからね」

「ほんま？ ありがとー。理由は後で言つから今はどーかに逃がし  
て欲しいんや」

「わかりました。……逃げるなら良ことじかにあります」

やつて木乃香をお姫さまだつじこで姫を跳んだ。

「ううかうさんなんやな。でもその神父をまみたいな格好似合つと

「一年程度居るつもりでしたから奮発してしまつて」

「でも、レオナルドさんけつ」一大きな家持つてゐんやな

俺と木乃香は逃げた後俺の家に来ていた。  
衰えていたと思っていたから強めに跳んだら予想以上に跳んでしまつてそのことを誤魔化してゐる途中。

「そうです、そうです」

「やうなんか?」

「ジャンプして着地してるだけです。難しこ」とじや無いですよ」

「す」かつたわー。まさか空を跳べるとは思わんかった

るな」

「IJH ちは副職なんですね。あとこれはカソックつていうんですね  
よ」

「やつなんや。初めて知った」

「知識が増えて良かつたですね」

「やつやね」

「「……あはははー」」

向かい合つて座つているのだけど視線が合つてない。……そう  
言えば日本は田を合わせないんだっけ？

「つかの顔になんかつことる?」

「付いてませんよ」

「なら顔を見つめてたのはなんでなん? 見つめられて恥ずかしい  
わー」

「外国だと逆に顔見てないと怒られるんですけどね。土地が違うと  
大変です」

一人で冗談を言い合つ。意外と楽しい。

話しゃべって話が弾む。

相手の話も聞いてるし此方の話も聞かせる。なごむことをやつしている。

話の途中で説明してもらったのだがなんでも今日はお見合いで、たらしい。

爺が勝手に決めたお見合いらしく自分はやりたくないとも言つていた。

「つまり、お見合いでしたくないんですね」

「あはは、レオナルドさん随分簡単にしもつたな。まあその通りや

「なら学園長に直談判しに行つては？ それでダメなら親に相談してみるとか。親に相談するならしつかりお見合いでしたくない、と伝えるんですよ」

「……うん。わかった。やつてみるわ」

「頑張つてください。あと、直談判するとき断られたら『おじいちゃんなんか大つ嫌い！』って言つたらダメージ食らつと思つます」

「それはいいな。機会があつたら試してみる」

そのあとも話は続いた。  
ふと、時計を見る。

「もうすぐ4時ですが、ここにいてもいいんですか？」

「いや、寮の門限もあるしもつ帰るわ」

「送りましょうか？」

「うん、お願こしめや」

……移動中……

「着きましたね。ではよしおうなり」

「ほな、またな。今日はありがとうな」

「いえいえ。この程度ならこくらでも良いですよ。では」

木乃香は手を振つて見送つてくれた。

大和撫子つて感じの美しさだった。似合つてゐしね。  
新学期始まつたら会えるでしょ。

木乃香は今日は出かけたと思えば帰つてみると機嫌が良かつた。

「木乃香ー、どうしたの？ すごい機嫌いいじゃない」

「今日はええ」とがあつてな。アスナ聞いてくれる？」

「私で良いならいくらでも聞くわよ」

そう言つと木乃香は話出した。

無理矢理やらされるところだつたお見合いから助けてくれた上対処方法まで教えてくれたらしい。

本当に良い人よね。前回もお金置いていつてくれたし。

「良かつたじゃない、木乃香」

「うん。これからは休みが増やせるんや」

結局、夜まで話してくれた。

大変だつたけど迷惑じゃなかつた。

だつて新しく担任になる人の性格ぐらい把握しておきたいじゃない。  
それになんだか懐かしい感じがするのよね。会つたこと無いはず何  
だけど……。

まあ、いいわ！ 考えてもわからないし。

木乃香は新学期が楽しみそうだった。

## 15話（後書き）

最後です。

これで原作のあのシーンが無くなつたぜ。  
原作入りたいな。

これで書きだめ無くなりました。  
次からは皆さんのお見などもとに作り上げていこうと思います。  
出来上がり次第投稿したいと思います。  
一週間は投稿する事ないと想います。  
意見を纏めるのにも時間がかかるしね。

「ここが北端大絶壁か。……ふむふむ、毎年秋にはフリークライミング部が大会を開く。……それでいいのか、麻帆良」

俺はとつても心配だよ。

やれることは大概終わり暇になつていた俺はパンフレット片手に図書館島を歩いていた。

一応敵対組織の俺がここに来て騒がれるのも嫌だつたから来なかつたけど

「 良いところだね。珍しい本もあるし」

近くの本棚から一冊取り出す。

『不忍忍法 教本』  
アウトか？一応セーフだな。  
表紙をめくる。

『左右田 右衛門左衛門』

「アウトオー！」

全然セーフではなかつた。  
元の場所へ戻す。

「読まなかつた方が良かつたか？……ん？」

戦闘教本の横に古そうな本があつた。  
興味を持ち手に取る。表紙にはなにも書かれていらない。  
表紙の次のページを見る。

そこには……

『虚刀流 四季崎記紀』

「もつとアウトじやねえか！」

今度は地面にたきつけた後悔はしていない。  
でも拾う。

「どうしよう……」

ここに置いておくには惜しかつた。  
なので懐へ入れる。こんど誰かに渡してみよう。  
見られてないか見回す。……よし、誰もいないな。  
ついでに不忍家の本も借りる。盗みじやないぜ？無断で死ぬまで借りるだけだ。

死んだ後家族が返しに来るがわからないけど。

入り込んだ時と変わらない動きで歩く。カソックの中は術式で影の倉庫に繋がってるから借りた本が見つかることはない。

「深部まで行ってみよつかな。」「こんなものあるならもつとい本あるかも」

言葉にしてから少し迷うが止めとくことにした。

いちいち何してたか、なんて聞かれたくない。

今も監視がされてるし。感覚的に魔法だと思つ。学園長だな。

「……鬱陶しいな」

対魔障壁を強くする。千里眼の魔法（仮）は耐えきれなくつて消えた。

「これでいいかな？」

立ち止まつ五秒ほど待つが動きはない。監視は千里眼の魔法（仮）だけだつたよつだ。

「さて、どこに行こうか」

」のまま、図書館島で探検するのも良いかもしない。  
下におり無くても面白い本も有るだろ？。

「とりあえず」を一周して本を探すか

夜にも用事があるが間に合つだらう。  
障壁を弱め次のエリアへ向かつた。  
独り言ばかりだけど気にしてくれんなよ。

「まさか魔導書が置いてあるとは……麻帆良恐るべし」

学生でも来れる場所に魔導書があつた。

魔力を発生させてる物だからびっくりした。

結構上級の魔導書で原典のようだ。かなり狂氣が染み込んでいる。

魔法使いは価値がわかつてないな。世の中の魔術師がどれだけ金出すかわからないほどの本なのに。

これを書いた魔術師は隠蔽が得意だつたようだ。

俺でも解析するのに時間がかかった。

……解析の結果、どうやら魔力を吸収し本に書かれた術式を発動させるものらしい。

中は初めの三十頁以降は白紙になつてゐるから不良品と思われてもしょうがないかもしねりない。

この本に魔力を与え術式を書き込まなければ発動しないので魔術師でも気づかないかも。

もちろんこれは頂いていく。一生返さない。死んでも返さない。

顔に笑みが浮かぶ。俺にちょうどいい本だな。

影の倉庫にしまう。帰つたら術式を書き込んでしまおう。五百頁はあつたから十分だ。

さらに奥の方へ歩いていく。

下へは行かない。造物主を封印している魔法使い『ロリコン』には会いたくない。

本棚の間をすり抜けしていくと広い空間へ出でてしまった。

どうやら一周したようだ。あれ以外に目新しい本はなかつた。どちらももうすでに持つてゐる物の写本だつた。詳しくは写本の写本の写本。神秘なんてかなり薄くなつてしまつてゐる。そんなものの実用に向かない。

本棚の間から出ようとすると横の梯子がギシギシと鳴つた。

「えーと……これはここでー……これはいつちでー

少女が梯子のかなり上方で本の返却をしていた。

すぐに目をそらす。他の人が来る可能性を考えないのだろうか。見えそうだった。

手には本を数冊持つていて非常に危ない。バランスを崩して倒れたらどうするつもりだろうか。

今考えるとそんなことを考えたのがフリグだったのだと思つてしまひ。

「あつ」

少女はバランスを崩して落ちてきた。

落ちるとき本を握んだのか一緒に本も落ちてきている。

避けられないよな……。本だけなら避けたのに。

受け止めるために膝を曲げ衝撃に耐える。

「ふんつー」「あやつ……」

少女を受け止めるとき物障壁を軽く発動する。

完全に発動して体に当たる前に弾く方法もあるが、怪我が無いのはおかしいだろう。

いまさら? 気にするなよ。

本棚が傾いたのか落ちてくる本も予想以上に多かった。

少女に当たらないように体で壁を作る。  
後頭部に当たることもあるが痛くなかった。

物が落ちる音が止まつた。埃が舞つて息がし辛い。  
ゆっくり目を開ける。辺りは本が散乱していた。  
少女の無事を確認する。怪我はしていないが目を閉じ体を丸めていて、まるで小動物のようだつた。

「大丈夫ですか？」

声をかける。……前髪長いな。邪魔じやないのか？  
今は辛うじて目が見えているが立つたら見えなくなるだろ？  
可愛いのにな。もつたいない。

「？  
……？」

少女は少し動き出す。目を開け、丸めていた体を伸ばした。

少女は俺を見て驚いていた。まあ俺のこと気づいてなかつたみたいだし、しじうがないかな。

「え？」

「あ、え？」

顔が赤くなったり青くなったりしていく。どうした？なんかしたか？

「どうかしましたか？」

「あ、う もう」

意味のある言葉を話す前に気を失ってしまった。  
……マジどうしろと？経験無いから困るよ。  
氣を失った少女の扱いに困つてついていると横の本による壁が壊された。

「ねえ、木乃香？ 私ついてきても良かつたの？」

麻帆良にある図書館島の下のところから上がりてくるときこそう聞いた。

木乃香は部活をここでやっているから良いかもしれないが部外者の私がここの中に入つていつてもいいのかしら。

「ええんよ。何いやましいことはないんや。堂々としよ」

木乃香は即答でそう答えた。

手伝つと直つた手前途中で逃げる訳にはいかない。

「良じつて言ひながや……まあ怒られたら謝ればいいが

うん、怒られるのはイヤだけどわかつてくれるわよね。

「次はここを右やな」

「ちよつと、木乃香速いつてば」

足取り軽い木乃香の後を追いかける。が、すぐにぶつかる。

木乃香は立ち止まってまつすぐどこかを見ていた。

「どうしたの？ なにかあった？」

「……明日菜、あれ、レオナルドさんやない？」

「え？ ベルメール？」

木乃香の横に立ち木乃香の指差す方を見る。  
そこにはなんだか黒いコートみたいな服装をしたレオナルドさんがいた？

あの黒いの見たことあるよ、うな……

「ほんとね。なにしてるんだる。ん？ ……本屋ちゃんがレオナルドさんの向かう先にいない？」

「ほんまやね。本屋ちゃんは借りてた本返しとるんやない？」

レオナルドさんばじんどん進んでいく。

「どうする？ 話しかけにいく？ セレオまで遠くないし」

「うーん……行ってみよか。昨日のお礼もしたいんや」

「じゃあ行きますか。道わかる？ いつも本棚の上走つてもいいんだけど」

「わかるからそれやらんといでな」

「わ、わかつたわ」

本棚の上を走ると、たどりたとき木乃香の雰囲気が怖くなつた。なんだから、後ずさつてしまつ。

あ、思い出した。美空ちゃんがいた教会の神父さんが、あんな格好してた。じゃあレオナルドさんも神父? いまいちよくわからなあ。

レオナルドさんの素性を考えながら階段を下りる。下に到着したとき何かが連続で落ちる音がした。

なんだか悪いことが起きた気がした。

「 木乃香! 」

木乃香を呼ぶ。木乃香は頷き走り出した。  
私も後を追う。

音は本屋ちゃんが居た方から聞こえた。  
もしも本屋ちゃんの居たところだつたら本屋ちゃんが危ない。

全力で走る。そして本屋ちゃんが居たあたりに来たら本で壁が出来ていた。

「……これはビリしたらいいのかじり

「やつやなあ……」「

困つてしまつた。山となつてゐる本は一人でどけれゐほど少なくな  
いのだ。

「困ったわね……」

「明日菜。これ蹴り飛ばせる?」

え？  
蹴つてもいいの？」

まあ、非常事態なんやから許してくれる……といいなあ」

「その希望が入った答え方は不安になるからやめて。……でも非常事態なんだから」

「いりやせん」

「うん、行くわ」

覚悟を決め距離をとる。そこから助走し跳んだ。

「ライダー ア... キック！」

壁になつていた本はぶつ飛ぶ。

壁後崩れるといそこには本屋ちゃんと本屋ちゃんを抱きしめたレオナルドちゃんがいた。

「あれ？ 明日菜さん？」

「あ」

「あ？」

「あ、あ、あんたは……あんたはなにしてるのよー。」

思いつめつめレオナルドさんの顔をぶん殴つた。

本屋ちゃんをだっこしたまま飛んでいく。

……ふう。あれ？ 私なにしてるんだろう？

「「う……あたしなにしてるんだ」」

「明日菜、もうここにやん。レオナルドさんも許してくれたやん」

「で、でも私殴っちゃったのよ？ やんな簡単に許してくれる訳ないじゃない。きっと本当はまだ怒ってるのよ」

あの後我に戻つてレオナルドさんと本屋ちゃんを救護室につれていつた。

本屋ちゃんは問題なかつたけどレオナルドさんは私のせいで頭を打つていた。

頭を打つただけで問題はなかつたらしい。

「明日から新学期なのよ？毎日レオナルドさんと会つじやない。…  
…不登校にならつかしく」

「明日菜。休んじやめつーやで。また明日話しかけてみれば良いやん」

「…………」

明日、学校行きついこなあ。

## 16話（後書き）

久しぶりに投稿した春秋です。

結局意見は一つしかいただけませんでしたが  
頑張りました。

主人公の性格に関してはどうしようも無いのでご了承ください。

感想、意見、評価お待ちしています。

## 闇話（前書き）

未来の出来事です。  
詳細は気にしないでください。

そこは魔法世界のどこにある小さな研究所の一室。

「くそつー、なぜだ！なぜなんだ！」

部屋にいた男の一人が拳を机にたたきつける。

周りにいた複数の研究者たちも絶望感を露わにしていた。

「なんで……なんで……」

ここでは一際おかしな物の研究をしていた。

世界樹について、ゲートの仕組みや誰が作ったのか、ケルベラス・クロス・イーターについて、気や魔力の効率化、竜種の魔力障壁の展開方法、土地ごとの犯罪数、などなど。

役に立つ研究もあつたし、役に立たない研究もあつた。

だが、今回は今までと違っていた。

ここでは研究者がそれぞれに意見を出しそれの中から研究する物を決めるのだが、今回はほかの物についての研究途中に一人の研究者が呟いたことから始まった。

これが今までと違つところ一つ目

一つ目は研究が全く進まないのだ。今まで完全に解き明かせなかつた物もあるがある程度までは進めていた。

だが今回ははじめの段階でつまづいたのだ。  
どの種類の生物なのか、それがわからなかつた。

研究者たちは頑張つた。

とある筋から対象のDNAを買い取つたり（途中からは匿名で毎月  
髪の毛などが送られてきた）、周囲の人間に話を聞いてみたり（比  
較的積極的に話を聞かせてくれた）、だがそれでもまだわからない。

「なんでコノエコノエモンの種類がわからないのだつ！」

そう、ここでは麻帆良学園学園長及び関東魔法協会理事、近衛近右  
衛門の研究をしていた。

「わからない、わからない、なぜ人のようなDNAなのにあのように  
な頭になるのだ」

そこが一番の不思議だつた。

旧世界で手に入れた近右衛門の娘とされる女性の頭は普通だつた。  
英雄『青山詠春』と近右衛門の娘との間に出来た子供も頭は普通だ  
つた。

そのほかの近衛家の一族の者の写真を見ても頭は普通だつた。  
なのになぜ近右衛門はあんな頭なのだ？

さらに不可解なことがあつた。

近右衛門は麻帆良学園創立にも居た、と記録にはある。  
だが麻帆良学園創立は明治維新後すぐにはつたはずなのだ。

「一百年生きられる人間は居ない。

上の理由から魔法世界の生き物かとも考えたが魔法世界の生き物は旧世界へは行けない。

いろんな想定をし、いろんな研究をしたが『突然変異種』とするのが今のところ研究者たちの共通の意見となっていた。

「くそっ……」のまま研究を終えてもいいのか？

「主任！主任！」

「ん？ なんだ新入り」

「新しい可能性をみつけました！」

「なんだと！ それはいったい何なのだ！」

「これです！」

走つてやつてきた新入りが見せたのは二つの文部。

「『ねらつひょん』に『仙人』？ なんだこれは？」

「『れらは』一つとも旧世界の極東と呼ばれる地域に生息していたと言われる生物です」

新入りが持つてきたのはどちらも頭の長い老人が描かれた文献だった。

「『ぬらりひょん』は誰にも不自然に思われないまま人の家で好き勝手する妖怪と呼ばれる種類の生物です。『仙人』は詳しくは文献に書いてありますが靈を食べ、何千年生きる元人間です。どちらも人のようなものでありますながら何百年と生きます」

「それはすごい！ この生物と考えればその正体がわかるかもしない！」

……だがなぜ我らはこれを発見できなかつたのだろうか

「それはこれ自体倉庫の奥深くにありましたし、旧世界の生き物だつたからでは？」

「確かにその可能性が高いな。よし、お前ら今からこれら二つの情報を集めろ！ すぐにだ！ これでこの研究も解明出来るかも知れん！」

うなだれていた研究者たちは元気を取り戻し情報を始めめる。

一部の旧世界出身者は旧世界で情報集めをするために研究所を飛び出した。

「さて、わしも頑張るか。新入りも頑張つたのだ年長者が頑張らなくてどうする」

「えっ？ なんでバレて……？」

「田のところに隠ができるとい。わしの田は誤魔化せんよ」

新入りの田の下には凄い隠が出来ていた。  
体もふらりふらしている。

「眠つとれ。あとほわじらが頑張るわい」

「……はい」

新入りは近くにあったソファへ倒れ込んだ。  
すでに意識は無いようだ。

主任は着ていた白衣をかける。

「全く、こんなになるまで頑張るよつて……」

その時の主任の顔はとても優しかった。

五年後、メガロメセンブリアで結婚式が開かれた。

小さな教会で開かれた結婚式には英雄である近衛詠春も訪れ、神父役には時の有名人、レオナルド・アンデルセンがやつていた。

その時のことを研究所の副主任出会った男性はこう話す。

『一十年も付き合いがあるがあそこまで幸せそうな主任は初めて見たよ。まさかあの新入りと結婚式するとは思つてもみなかつた。まあ長命種だつたから相手も長命種でよかつたと思うよ。外見的に言えば五歳くらいしか違わなかつたからね。自分から言えることなんてこの程度さ。あとは本人達に聞いてくれ。二人に末永き幸せがありますように』

研究所ラブストーリー

『あなたに恋して』

絶対に公開されない！

題名とかひとつにはなにも言わなことでください。  
センス無いことはわかつてます。

皆さん読んでくれてあつがひとつです。

## 17話（前書き）

すみません。遅れました。

少々おかしな点があるかも知れませんが  
学園結界と「都合主義のせいだ」とお思いください。

静かに夜道を一人で歩く。向かうは世界樹前広場。そこで俺を待つているらしい。

今は午前0時頃。本来なら家でゆつたりしている時間だった。階段を上がる。既に人払いの境界がしてあつた。

「ふおつふおつふお。時間ぴつたりじゃのう」

「約束は守りますよ。約束はね」

爺の細長い頭が見えて苛立つ。

爺の横にはいろんな年の魔法使いが揃つていた。

「今日は自己紹介すればいいんでしたっけ?」

「うむ、では早速自己紹介してくれんかの?」

爺が俺に促す。

……苛つく顔だ。全て自分の思い通りになるとでも思つてそつだ。

「では、初めて麻帆良の魔法先生、魔法生徒の皆さん。私は法王<sup>ヴァチカン</sup>所属のレオナルド・アンデルセンと言います。ここへは卒業課題として教師をするためにきました。」

「今までこのかわからせんがよひじへお願ひします」

笑顔で丁寧にお辞儀をする。

面倒くさこ。ここに来て一番面倒くさこ。

これならどつかの魔術師の家を襲撃する方が楽だ。

周りの奴らはなにを慌てているのかうるさかった。

……ああ、法王<sup>ヴァチカン</sup>所属と言い切ったところか？

周りの奴らも高畠と同じか？

「ふむ、少し問題があるが……まあいいわい。次にレオナルド君には模擬戦を」「断ります」「ふおー？」

「なんでそんなことしなければいけないんですか？ 約束は時間と場所、あとは自己紹介するだけでしたよね？」

「わしはちゃんと話したぞい」

「聞いてません。ふざけなこいぐださこ」

「じゃが、ここまで来たんじゃ。模擬戦してもあいと思わんか？」

「思いませんね。だいたい普段から武器を持ち歩いているとでも？ 私はそこまで物騒な人間ではありませんよ」

「じゃがのう……」

爺はまだごねてくる。本当に面倒くさい。  
いい加減にしてくれ、と言いたい。

い加減にしてくれ、と言いたい

刹那たちの方を盗み見る。

マナは笑っているし、刹那は不満そうな顔をしていた。

嘘つきとでも言いたいのかな？

「すいません、学園長先生。発言しても？」

「む、ガンドルフィー二君。なんじゃ?」

「私は新しい警備員のメンバー紹介と聞いていたのですが……どういうことか聞いてもよろしいですか？」

おいおい。初めに俺は断つたはずなんだが。外堀から埋めよう、つてか？

手が甘かつたな。ぬるま湯につかりすぎてボケたか。ここで追い討ちをかける。

「私は聞いていませんが？自己紹介するだけと聞いていたのですが？それに警備については前に断つたでしょう」

魔法関係者たちは一斉に学園長を見る。いい気味だ。驕つているからそんなことになるんだ。

「なぜ警備に参加しないのですか？立派な魔法使いを田舎している  
ならば参加するべきです」

若い女の声がする。俺には誰だかわからないがここにいる皆はわかる  
ようだ。皆がそちらを見る。

「高音君かね」

爺が名前を言つたのは金髪の女子生徒だつた。  
お嬢様つてかんじだね。隣にいる赤髪の子はおりおりしてゐる。  
あ、爺が勝ち誇つた顔してやがる。銃剣と黒鍵で針鼠にしたい。

「聞かれてあるがそこのところがどうなのじや？」

鬚や眉で見えにくいけどにやにやしてやがる。ほんと苛つくな。人  
間相手にここまで苛ついたのは初めてだ。

「そうですね。ではガンドルフィーー先生……でしたよね？」

「ああ、それであつている」

「では、ガンドルフィーー先生。あなたは教師と警備員をしている  
のですよね？」

「確かに」

「その二つを両立するのは大変ではありませんか？」

「それは大変だがこの学園を守っているのだ。嫌ではない」

「はは、人として素晴らしいですね。まあ、今重要なのは両立が大変である、という点なのです」

「なにが言いたいのじゃ？」

「ここまで言つてゐるのにわからないのかよ。本当にこの学園大丈夫か？」

「急かさないでくださいよ。先ほどガンドルフィーー先生は両立が大変と言されました。

おそらく教師歴も長いのでしょう。新入りの人は発言をひかえるでしょうから。

教師としての何年もやつてきた人が大変と言つてゐるのに数ヶ月前にいきなり教師をやれと言われた人間が警備と仕事を両立出来るでしょうか

「爺を見て次に周りの関係者も見ていく。  
大概の人は深くうなづいていた。

「出来るじゃねつ。」  
にいる魔法先生は全員がこなしておつた

「ならば周りの魔法先生に聞きます。新人のころ業務が遅れたり、寝不足で授業が上手くできなかつたりしませんでしたか？ または警備中に大怪我をしたような人はいませんでしたか？」

また魔法先生を見る。苦い顔をしている人や悔しそうな人が多かつた。昔の自分を思い出しているのだろう。

「それが警備することとなんの関係がある！？ そんなこと問題ではないじゃね？！」

爺が前に出てきて口を挟んでくる。いちいち煩い爺だ。人を待てんのか？

はあ……と大きくため息をしてやる。

魔法先生の責めるような目が爺に集中する。

ほんと呆れてしまう。

「学園長、あなた大丈夫ですか？ あなたは教育を手抜きでやつても問題ない、と言つてるようなものですよ。しかも最後の台詞は教育者としては失格の言葉ですし、組織の長としても最悪ですよ」

その言葉で気づいたのか、爺は後ろを向く。

魔法関係者の目に含まれているのは主に侮蔑に呆れ、怒りだつた。駒扱いされれば誰でも怒るし、ここまで気づいてなかつたならば呆れもするし馬鹿にもする。

データには昔の輝かしい栄光が書かれていたが……あり得ないな。馬鹿を相手にしていたのか、衰えたのか。きっと前者だらう。経験があるならば今日のよつた馬鹿な真似はないだらう。

「私は人の将来に関わる仕事をするのです。やるならば全力でやりたいと思つています。ですので私は警備をやりたくありません。では、私はこれで失礼します。

長々と聞いていただきありがとうございました」

頭を下げる。今まで麻帆良の防衛を頑張ってきた人達なのだ。尊敬している。爺は論外だが。

「まつ、待つん「君の考えはよくわかったよ。真面目で良いことだ。これから頑張つてくれ」

「はい、精一杯全力で頑張らせていただきます。では

もう一度お辞儀をする。頭を上げ懐から転移魔法符を取り出した。爺はなにか言いたそうだったが周りの空気のせいでも言えない。下に魔法陣が出てくる。そして魔法陣は光を発して発動した。

一瞬で家の寝室につく。

眠かった俺はカソックも脱がずベッドへ倒れ込む。

面倒だつた。だけど基本魔法使いが真面目で良かつたよ。

言ったことすべて本当で嘘ではなかつたから簡単に信じてくれた  
し。

あとは良好な関係を築いていきたいね。

## 17話（後書き）

いやー、大変でした。

先週は土曜日も出校だったし。

俺は休みの間に纏めて書いているのですがその休みが少なかつたから遅れてしまいました。

あと、100000PV突破時の閲話は原作に入れるとここまで進んでからになります。

今回は魔法関係者を味方にする回ですね。

多量の「都合主義」と隠し味に作者の都合が入っています。

次の投稿はいつになるかわかりませんが温かい目で見守りください。

感想、意見、評価。

お待ちしています。ごじごしください。

## 閲覧数（前書き）

総合評価	400pt
お気に入り登録	165件
p.v	120144
ユニーク	14300

突破記念です。

ゆっくり読んでいくってね！

ワシとレオとの出逢いはワシが古巣である第13課イスカリオテに訪れたことから始まる。

「これは、これは法皇様ではありませんか。こんな殺戮者の家に何のようですかな」

当時機関長を始めて14年目のヴァン・マルクスが出迎えてくれる。ワシが法皇に選ばれた年になつたからよく覚えていた。  
……しかし殺戮者の家とは皮肉のう。

「はじめから知っていたくせによく嘘つわい。それにワシが此処にいたことを知つて殺戮者の家なんて言つておるのか？ ん？」

「まあか！ そんなことありませんよ。少しばかり法皇様が来られてはしゃぎたよつて口が変なことを言つてしましました。御無礼お許しき」

相変わらず嫌な奴じやつた。

「まあいいわい。アンテルセンはどこにある？ 久しづつ動いくつと思つてきたのじやが……」

辺りを見回す。いつもならアンテルセンも一緒に来て居るはずなのだが姿は見えない。  
さらに他の機関員も見当たらない。

「アンテルセンでしたら中庭で稽古をつけていますよ。暇な機関員は見物しに行っています」

「アンデルセンが稽古？ それは本当のことかの？」

「ええ。嘘なんて吐いてどうします。嘘を吐く価値もない情報です」

自分には半ば信じられなかつた。今までも聞いた情報だつたが信じていなかつたのだ。

大体アンデルセンが弟子にするほどの素質がある者が居なかつたのだ。容易く信じられるわけがなかつた。

情報の真偽を確かめるために行くことにした。

「まさかの……」

目の前には異様な光景が見えていた。

銃剣を巧みに操り攻撃をいなしていく金髪の男 アンデルセン。

こちらはいつも通りだった。しかし相手をしている者が異様だったのだ。

アンデルセンと同じく銃剣を操り斬りかかり、投擲する。さらには拳銃まで使って戦っているのは綺麗な金髪の 五、六歳にしか見えない少年だった。

「 レオナルド・アンデルセン、5歳。旧名レオ・スプリングフィールド。魔<sup>あが</sup>法世界の英雄<sup>殺戮者</sup>、ナギ・スプリングフィールドの長男ですな」

「 なつー！」

歳だけでも異常なのにあの『ナギ・スプリングフィールド』の息子  
が第13課に居ることが異常であった。

それにそんな諸刃の剣をこのヴァン・マルクスが所持している」と  
が一番の異常だった。

「機関員一年目の新人ですが、あの銃剣<sup>バロネット</sup>が一から育て上げた銃剣<sup>バロネット</sup>の後継です。

実戦経験も積ませましたし、人を殺すことにも慣れさせました。化<sup>フリ</sup>物<sup>一ヶス</sup>の弱点なども詰め込みました。現状では上の下と言つたところで

しおつか

「…………」

吃驚して物もいえなかつた。先ほどヴァンが言つた言葉にもだが少年の目が異常だつた。

地獄の穴を覗いているような、そんな不気味な目だつた。見ているだけでこちらの全てが見抜かれているような、そんな気持ち。

嫌悪感はわからなかつた。嫉妬もなかつた。

ただ素晴らしい。

そんな気持ちしかわからなかつた。

全てが異常で出来ている正真正銘のバケモノ。

田を見るだけで読みとれる。

全てを一つに賭ける。一回で負けか勝ちが決まる生き方。異常とか言いようがない。

だがそれこそが強者に近づく一番近い道なのだ。

自分が成し遂げる」との出来なかつた道を「の少年は「の歳で成し遂げているのだ。

素晴らしい」としか思えなかつた。

ちょうど稽古が終わつたのを見てワシは歩き出した。途中で顔も取り繕つ事もなくそのままの顔で進んでいく。

少年との距離が5mのところでも一人ともがこちりに近づく。がそんなこと関係ない。

少年の前に膝を突いて田線を合わせる。

「え、と。なんでしょうか

少年は慌てているようだ。何故だらうか。

ああ、ワシは法皇だつたか。

だがそんなことどうでもいい。

「少年よ。何故ここまで自らを磨き上げる。何故力を欲する」

「

いつの間にか静かになっていた中庭で少年に聞く。  
誤魔化されることも嘘を吐かることも考えつかなかつた。

「俺は

「ふむ

「 石となつた村人家族を助けたい。村人家族を石にした悪魔に復讐した  
い」

「ほひ……」

似ていた。ワシとそつくりだった。

始まりは同じなのに此処まで違つた。

才能もあるが気持ちの強さも違うのだろう。

ワシは逃避という生き方を知っていたが、この少年は知らない。

故に愚直に進み続けることが出来る。

「ワシにも弟子入りせんか？ もつとほかの物も教えてやるつ

少年は逡巡なく頷いた。

「「」こんな感じじゃったかのう？」

「そんな感じでしたね。今思えば懐かしいです」

二人はヴァチカンにある小さなテラスで紅茶を飲んでいた。

「で、明日出発じゃったか？」

「ええ、今までお世話になりました。ちょっと停滞しておきます」

「ふむ。一休憩入れる」とも必要じやで

「ははっ。その通りですね」

レオナルドが立ち上がる。

「では

「また元氣で会おう」

レオナルドは後ろを振り向くなく進んでいった。

「レオナリードまで行くんだじゃね？」「……」

法皇の独り言は誰も聞くことなく空氣に溶けていった。

## 閑話式（後書き）

こんな話が多い春秋です。  
読んでいただきありがとうございました。

閑話はまた出します。

いつになるかはわからぬであります。

## 1-8話（前書き）

遅れてマジでいませんでした。  
部活が忙しかったんです。あと学校も。中間テストがありましてね。

学園長のいる学園長室へ向かう。

昨日のあの後学園長は逃げたらしい。

朝、シスター・シャークティが教えてくれた。

麻帆良の魔法関係者からの評価が下がりまくつて。あの流れだったらどうしようもない気もするけどね。

学園長室のドアをノックする。

知ってるか？正式には四回ノックしなきやいけないんだぜ。一回はトイレだそうだ。

……え？ 知ってる。あ、そう。良かつたね。

「失礼します」

部屋の中から殺気が漏れてくる。

感じの違う殺気が一つ。この感じは高畠と爺だらつ。

あれぐらいで怒るなよ。原因はお前だろ。

扉を開ける。遮るもののが無くなつて殺気が直接当たつてきた。二人は鬼の形相だ。気持ち悪い。

「よく来れたのう」

さらに殺気を強めてくる。

だが普通の魔法使いよりは上程度。親父に比べれば雲泥の差だ。

「気にする」ともない。

「来なければ仕事が出来ないでしょう。社会人ならばそこのある  
りはしつかりしないと。

これで挨拶も済んだので行かせてもらえますか?」

「ふん、わかつたわい。高畠君」

「はい」

爺の横にいた高畠が前に出でくる。

「こいつからも殺氣がでている。……なんでこんな怒つてんの?」

「ヒカルでレオナルド君」

「ん? なんですか?」

「わしに呪いをかけたか?」

「あ、はい。かけましたね」

「 なつ! ?」

「の」と怒つてたのかよ。つまらんな。  
むしろガキ相手に脅しにかかる爺の方に怒るべきだろ。

「学園長、早くこひくれません？　この程度のこととで生徒待たせたらいけないでしょ？」

「この程度、だと……」

「この程度ですよ高畠先生。たかだか一部のことを話せなくしだだけじょ？が。解けないわけでもあるまいし。良い年した男がごちやくじゅうとうひるそこですよ」

「貴様　！」

高畠が掴みかかってくる。本当にこいつ強いのか？隙だらけだ。思わず串刺しにしてしまいますくなるそのとき扉がノックされる。

「2-Aの神楽坂です。高畠先生は　」

開けながら言われる声にびっくりする。  
彼女に見られる前に銃剣をしまつ。

「　居られますか、つて。え？」

彼女の動きが止まる。

そりや自分の担任が人に掴みかかってたら驚くよな。

「あ、いや、何でもないんだ、気にしないでくれ明日菜君」

「……はい」

俺の力ソックから手を離し誤魔化す。

彼女は困惑している。高畠と俺に対しても

……あれえ？ 何かあつたつけ？

高畠に関してはわかるけど。良い人の振りしてるらしいし。何があつたかな？

考える。考える。考える。思いつく。

もしかしてまだ図書館島の事気にしてるのか？ 別にいいのに。

「神楽坂さん、先に行つといてくれませんか？ もつすぐ予鈴がなると思ひますんで」

「そ、そうだね。行つといてほしいな

「は、はい。私は先に……」

「また後で会いましょう」

逃げるよつに走り去つていく。

高畠からか俺からかはわからない。俺ではないことを祈る。

「学園長、俺も行かせてもらいます」

「……行けば良かろう」

「ええ、では

用事もなくなつたので2・Aへ向かう。

出るときも殺氣が当たつていたが気にしなかつた。

「いいが、2・Aですか

扉の前にたつ。何か仕掛けはあるかと思っていたが何もなかつた。新田先生から聞いていて楽しみにしていたのに。

残念だが今度に期待することにして扉を開いた。  
騒がしかつたクラスが静かになる。

基本騒がしい方が好きだがこんな時なら静かな方がいい。

そのまま教卓へ進む。……何もなかつた。黙のこと少しほは期待してたのに。

何のアクシデントもないまま教卓へついてしまつた。  
困つたな。面白うこと考えてないや。

前に目を向けるとさよさんが手を振つてくる。  
クラスにとけ込めてるかな。

「すいませんが……」

「なんですか？」

「あなたは誰ですか？」

金髪のお嬢様つて感じの女の子が聞いてくる。  
食後に紅茶でも飲んでるようなタイプ。

時計塔にいたあの子思い出すな。名前知らないけど。  
貴族つて思つてくれればいいよ。でも吸血姫とは違つね。うん。  
おつと質問されてるんだつた。

「私は今度から高畠先生の代わりにこの担任になつた者です」

「高畠先生はどうしたんですか？」

「なんでも出張の方に専念するとか」

「やうなんですか。ではあなたの名前は?」

「デルド・マクド ルドと言います」

「「「「「「オイッ……」「」「」「」「」「」「」」」

クラス全員の声が響く。……窓がガタガタ鳴ってるぜ。この年の元氣は恐ろしいな。

「間違えました。レオナルド・アンデルセンと言います。気軽にレオナルド先生、と呼んでください。よろしくお願いしますね」

クラスが騒がしくなる。どうこうした反応をすればいいのか困つてゐんだろうな。

ついでになんでもデルドかと言つとマックが好きだから、である。

このままじや話が進まないなあ。次の歴史に食い込んでしまう。丈夫だけど。

だつて俺が歴史教えるし。

いつの間にやら歴史の先生にされてた。嫌じやない。

今日の朝聞いたけど正直嬉しかった。

歴史好きだからね。この時ばかりは爺を讃めたくなつたよ。

「質問があります」

再度静かになり後ろを向いていた生徒も前を向く。

「一時限田の歴史は俺の担当なんですが……授業をするか俺と田畠さんとの話し合いで場にするか、どちらが良いですか？」

「…………」「話し合いで……」「…………」「…………」「…………」

「でも、話し合いですると次から授業の早さが1・5倍ぐらいになりますがどうします?」

皆は話し合いを始めた。

話し合いの件だが前任の先生は少し教え方が下手だったようで遅れている。

他のクラスの場合は遅れていらないようなのでこのクラスが例外なんだろう。

話通りついやこし。

キーンゴーンカーンゴーン……

授業が始まった。

もともと休憩の時間にやつてたしね。

「みなさん決まりましたか?」

「話し合いでいいでーす!」「わたしも!」「私は授業やつてほし

いかな」「話し合いでしょー。」

「では話し合いでしょー。」

「…………はーい」「…………」

「では、私に質問してください。ただし、代表者を決めてくださいね。聖徳太子のような真似は出来ませんから」

「じゃあ、私が代表やるよー。」

パインアップルみたいな頭の少女が出てくる。  
たしか朝倉だつたか。

「みんな集まって質問を決めてくださいね」

ほとんどの生徒が中央に集まり話し出した。

一部の生徒は集まってないな。

眼鏡の子とか刹那とかマナとかさよさんとか魔族とか幼女とか。  
わよわんは金曜に入つたからいまいちとけ込めてないのかな?

「じゃあ、レオナルド先生！ 質問始めるよ」

「あ、はい。いいですよ。どんどん質問してくださいー。」

さよさんの心配しておつむにまともつたようだつた。  
よし、なるべく答えてやんよー！

「一つ目の質問は、なんで神父の服着てるの？  
これはみんなからの質問だよ」

「着慣れてるからです。詳しく述べ兼業です」

「それって、いいの？」

「いけませんよ。だから皆さん真似しないでくださいね」

「ツツ ツツツツだけど次行くね。  
一つ目は好きな人はいますか？」

「いますよ」

「それってどんな人ーー？」

触角の付いた少女が立ち上がる。答えようか、ビラシようか。  
困ったが俺の勘がいいことにはならないと言ないので抱締する  
ことにする。

「言いたくないです」

「えへ、教えてほしいな」

「嫌だな～」

「どうしても？」

「どうしても、です」

「絶対？」

「ここに、害虫もどき。その触角引寄せたりやないつか」

「ひどい？」

「うへん。答えてくれないみたいだから聞きたいけど時間がないから次行くね。

趣味は？」

「ちよつ、朝倉」

「遺跡巡りと睡眠と読書ですね」

「無視？ 無視？」

「遺跡つてどのなの？」 「どんな本読むんですか

「どんなんでもです。お勧めできない趣味ですが。本に関していろんなもの読みます。ファンタジーとか夢がありますよね」

「へえ。じゃあ次は

「……もうこ～よ

この話し合いの場は授業が終わるまで続いた。  
害虫もどきの落ち込みはすぐに元に戻った。

途中で戦えるのか、なんて質問が出たけどなんでだろうか。一般人  
の振りしてるので。

潜入捜査なんてこともするので必要なスキルでもある。  
こんな感じの先生一田田でした。

## 1-8話（後書き）

漸く教師が始まりましたね。

1-7話もかかってしまった。流れが遅すぎるのでどうつか？  
とりあえずこれからもよろしくお願ひします。

誤字、意見、感想お待ちしています。

是非感想を書いてください。

それが作者の活力となります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7938v/>

---

魔法先生レオま！？

2011年10月9日09時37分発行